大田市松田谷横穴群

8 2

育 委 員 会

例　　言

1. 本書は1979年6月4日～同年10月31日の間、島根県（農林水産部　農業技術センター）から委託をうけて島根県教育委員会が実施した、島根県立農業大学校予定地内における埋蔵文化財調査報告書である。
2. 調査場所は島根県大田市波根町970 番地1 他である。
3. 調査は次のような組織、構成で行なった。

調　査　員	石井　悠（島根県教育委員会文化課文化財保護主事：調査時、以下同じ）
	勝部　昭（同文化課係長）、西尾克己（同文化課主事）
	大国晴雄（大田市役所税務課主事）、田根裕美子（文化課嘱託）
作業員及び協力者	石橋剛之、松本隆司、渡辺治美、下垣兵三、黒河邦之、川崎加奈子、和田伸子、村上紀美子、小原明美、田中純一、渡　吉正、板木三穂子

4. 調査及び整理にあたっては以下の諸機関、諸氏に多大なる御協力、御援助を賜った。

   大田市、大田市土地開発公社、大田市森林組合、大田市立図書館、大田市教育委員会、大田市勤労青少年ホーム、大田市隣保館

   福田宏江、㈱青木組、㈱日本道路、建設省出雲維持事務所
5. 本書の執筆・編集は主として大国晴雄が行ない、勝部　昭の協力を得た。また1969年、国道9号線バイパス工事に伴って調査された横穴についても『島根県埋蔵文化財調査報告』第Ⅱ集の報告文と原図（県教委保管）により併せて報告した。
6. 掲載図・写真等は調査時に作成・撮影したものであるが、一部については関係機関の承諾を得て転載させていただいた。なお、実測図の方向は調査時における磁北である。

   また、横穴実測図中の遺物番号は、遺物実測図の番号と一致する。
7. 出土遺物は大田市教育委員会に保管されている。

目　　次

Ⅰ、調査にいたる経過 …… 1

Ⅱ、遺跡の地理的、歴史的環境 …… 3

Ⅲ、横穴群の概要 …… 6
　Ⅰ群 …… 7
　Ⅱ群 …… 11
　Ⅲ群 …… 26
　Ⅳ群 …… 30
（付）　表面採集された遺物 …… 31

Ⅳ、小　　結 …… 33

図　版　目　次

図 1.　調査区設定図 …… 1
2.　周辺の遺跡分布図 …… 5
3.　横穴群分布図 …… 6
4.　Ⅰ群 1 号穴実測図 …… 8
5.　Ⅰ群 2 号穴実測図 …… 8
6.　Ⅰ群 3 号穴実測図 …… 9
7.　Ⅰ群 4 号穴実測図 …… 9
8.　Ⅰ群 5 号穴実測図 …… 10
9.　Ⅱ群 1 号穴出土遺物実測図 …… 11
10.　Ⅱ群 1 号穴実測図 …… 12
11.　Ⅱ群 2 号穴実測図 …… 13
12.　Ⅱ群 3 号穴出土遺物実測図 …… 14
13.　Ⅱ群 3 号穴実測図 …… 15
14.　Ⅱ群 4 号穴実測図 …… 16
15.　Ⅱ群 4 号穴出土遺物実測図(1) …… 17
図16.　Ⅱ群 4 号穴出土遺物実測図(2) …… 18
17.　Ⅱ群 5 号穴実測図 …… 19
18.　Ⅱ群 5 号穴出土遺物実測図 …… 20
19.　Ⅱ群 6 号穴実測図 …… 21
20.　Ⅱ群 6 号穴出土遺物実測図 …… 22
21.　Ⅱ群 7 号穴出土遺物実測図 …… 23
22.　Ⅱ群 7 号穴実測図 …… 24
23.　耳環・玉類実測図 …… 25
24.　Ⅲ群 1 号穴実測図 …… 27
25.　Ⅲ群 1 号穴出土遺物実測図(1) …… 28
26.　Ⅲ群 1 号穴出土遺物実測図(2) …… 29
27.　Ⅲ群 2 号穴実測図 …… 30
28.　Ⅳ群 1 号穴実測図 …… 31
29.　表面採集遺物実測図 …… 32

Ⅰ　調査にいたる経過

１９７９年大田市波根町に島根県立農業大学校建設計画が具体化した。ところが、ちょうどその予定地に古代石見国では浜田市下府町の下府廃寺、那賀郡旭町の重富廃寺とともに私寺と考えられる天王平廃寺が所在するとみられたため、直接事業を担当する島根県農林水産部農業技術センターとその扱いについて昭和54年５月協議をした。そこで、天王平廃寺の範囲を確認することを第一とし、さらに広大な建設予定地であり、近くにある松田谷横穴群の他にも遺跡の存在する可能性があったので、急拠、部分的な発掘調査をして確かめることになった。何分にも急なことであったために、県文化課としては十分な調査対応ができず、大田市の格別の助力を得ることとなった。

調査は天王平廃寺の広がりと遺構の有無の確認のため農業大学校の建設されるところを中心にトレンチを設定し発掘した。その結果、相当な砂の堆積があり、数ｍ掘っても地山面に到達できないところが多かった。地山面に到達できた丘陵頂部やそれに近いところの場所については一部、土坑状のものなどが認められはしたが、時代を特定できる遺物などの資料はなかった。殊に、天王平廃寺に関係するものが存在するであろうと予想していたものの設定したトレンチの中には何らその形跡を認められなかった。

このため、農業大学校建設予定地内に存在する松田谷横穴群の取扱いをどうするかが焦点となり、文化財保護側は現状保存を希望した。しかし、最終的には事前調査もやむをえないということになり、松田谷横穴群の発掘調査を実施することとなった。暑い盛りで、現場作業は大変であったが、地元の方々の格別の御協力によって無事調査を終えることができた。

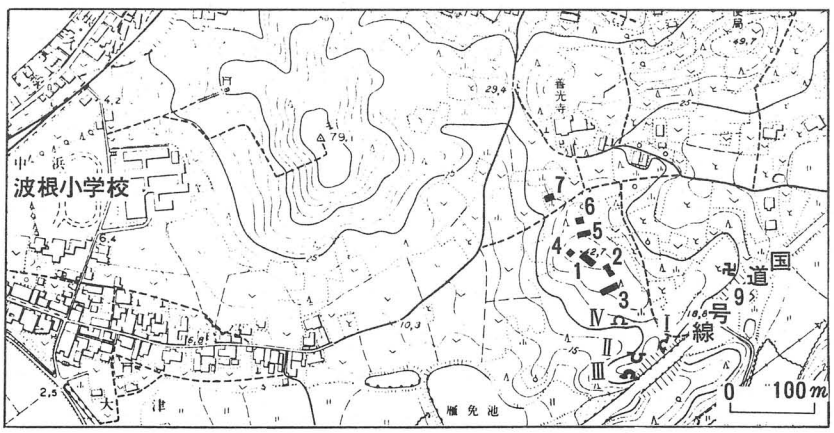


図１　調査区設定図（１～７：トレンチ、Ⅰ～Ⅳ：横穴群）

調　査　日　誌　抄

1979年

6月4日　試掘調査開始（Ⅰ区）
6月7日　Ⅰ区でピット確認
6月26日　1～6区試掘調査終了
　　1区で土坑、ピットのみ検出
6月28日　松田谷横穴群の調査に入る
　　蝮出現、戦果2匹
7月2日　Ⅱ群3～5号穴を併行して確認
7月3日　Ⅱ群3～5号穴、遺物ほぼ判明
7月6日　作業員を増員する。
7月8日　Ⅰ群、Ⅲ群の立木を伐採、搬出
7月13日　Ⅱ群3号穴人骨の取上
7月16日　Ⅲ群1号穴を検出
7月17日　Ⅲ群2号穴を検出
　　松の根を取り除くのに手間どる
7月31日　Ⅲ群下段を掘下げるが横穴なし
8月1日　酷暑、作業はかどらず
2日　〃
8月20日　Ⅱ群7号穴掘下げ
8月27日　Ⅱ群6号穴を検出
8月30日　Ⅳ群1号穴掘下げ
9月3日　Ⅱ群の全景写真を撮影
9月4日　Ⅳ群1号穴周囲の掘下げ、確認をして、現地作業を一応終了
9月14日　現地補足調査を終わり、室内作業にとりかかる。
12月　調査を終える。

'69年調査と'79年調査横穴対照表

1979年調査No.	1969年調査No.	調査年	備考
Ⅰ群1号穴	同左	'69	長1.80 m×幅1.96 m×高0.86 m
2 〃	同左	〃	(0.74) × 2.30 × 1.05
3 〃	同左	〃	(2.07) × 2.03 × 1.00
4 〃	同左	〃	(2.00) × 2.30 × 1.25
5 〃	同左	'79	1.90 × 2.80 × 1.00
Ⅱ群1 〃	同左	'69	2.65 × 3.80 × 1.80
2 〃	同左	〃	2.50 × 2.90 × 2.00
3 〃		'79	2.50 × 3.30 × 0.60
4 〃		〃	2.00 × 2.90 × 1.10
5 〃		〃	1.70 × 2.40 × 0.70
6 〃		〃	2.10 × 2.30 × 0.95
7 〃	Ⅱ群3号穴	〃	2.20 × 1.30 × 1.05
Ⅲ群1 〃		〃	2.00 × 2.72 × 1.00
2 〃		〃	1.70 × 0.60 × 1.20
Ⅳ群1 〃	Ⅱ群5号穴	〃	(2.20) × 3.50 × 1.50
	Ⅱ群4号穴		横穴と認められず

Ⅱ　遺跡の地理的・歴史的環境

島根県の中央、やや東に存在するこの松田谷横穴群は出雲と石見の境近くに存在している。

平野に乏しい石見部にあって、この一帯は数少ない平地の一つに数えることができ、そこには古くからの人々の営みが成立しうるような自然的条件がある。

むろん、日本海からの季節風は激しいが、海岸線に断続的に存する独立小丘陵はいくぶんかその風を防げ、その南側に集落を発達させている。

南に低丘陵を控え、大規模な河川のないこの一帯は、さらに戦後まで存在した波根湖によって、その可耕面積をいっそうせばめられている。

さて、近隣には縄文時代の遺跡は知られていない。僅かに日本海をのぞむ波根町灘山の丘陵上で黒曜石片が採集されているにすぎない。この時期の生活は、遺物の出土からするとむしろ三瓶山を中心とする山間部において多く営なまれたものと推せられるところである。

水稲耕作の始まった弥生時代になると、この平地部も活発化する。少し西になるが、長久町土江遺跡では前期前半の土器の出土が知られており、その後古墳時代に至るまでの遺物が断片的にではあるが知られ、この静間川流域における水稲耕作の開始を教えてくれる。また、鳥井町笠ケ鼻では中期後半～後期初頭の土器が表採されて、この地においても生活が始められていることがわかる。最近、長久町鶴山遺跡でも弥生土器が検出された。

しかし、東半部である波根・久手の一帯では現在のところ弥生時代の遺跡・遺物は発見されていない。しかし、波根湖と日本海の間に形成された砂丘は生活の場としては良好で、古墳時代の土器が多く出土しているところからみて、十分に遺跡の存在は予測しうるところである。

大きな社会の動きの中で成立した古墳時代、その前期前半に属する古墳はこの地域においては確認されていない。そして、この時期の遺跡、遺物もきわめて少量しか知られていない。

その中で僅かな例の一つとして、久手町大西地内出土の土師器壺があげられるのみである。また、久手町竹原の低丘陵の頂部に存在する竹原古墳（円墳・径約30ｍ）が、いくぶん古い様相を示しているが、これもまたどの時期に築造されたものかは詳かでない。

ところが、古墳時代の後半になると、この地域では横穴・横穴群が爆発的に出現する。

この横穴・横穴群はその分布にも濃密があり、この久手・波根の南側丘陵地帯はその密集地の一つである。大半の横穴は古くから開口していて、遺物が明らかとなっているものは少ないが、調査されたものの中には鉄器や玉類をかなり副葬しているものもあって、かなりの階層にわたって横穴が築造されていることがわかり、横穴式石室がこの周囲にほとんど見あたらないこととも併せ興味深い。（注１）

また、横穴の中には整正家形や家型を意識したものもいくつか認められ、屍床をもつもの、棺台を持つものもあって豊富な形態をとっている。が主流となるのはこの地域の特質とされる床面正方形、平天井形式のもので、きわだつ集中をみせており、丸天井様のものを含めると、九割以上はこの形式の中におさまる。（注２）

この横穴の盛行以降、まず注目すべきものとして近接する天王平廃寺があげられる。部分的な発掘調査によって塔心礎、金堂基壇が検出され、なかでも塔心礎は円形方形二段の舎利孔をもつ大形のものであり、石見における三例の寺院のうちの一つとして注目され、また時期が奈良時代前半とされるところも、古い時期の寺院址として関心がもたれる。（注３）

奈良時代のこの周辺の様相は風土記の残る出雲国に比べ、詳かでないが、やや時代は下るが、『倭名類聚抄』には波禰郷、刺鹿郷の二郷が存在しており、横穴群が二大別できることとも併せ、当時の村落をいくらかさし示しているといえる。

これ以降の遺跡、遺物は戦国期にまで下り、波根氏の朝日山城が東に、多胡氏の岩山城が西に存在したことが文献や城跡から知られる。

また、今回調査した横穴群中から出土した土師質土器（カワラケ）もほぼこの戦国期と考えられるところがある。

その後の大きな動きとしては、やはり昭和２４年に行なわれた波根湖の干拓があげられ、自然的・社会的条件を大きく変えたことが推定される。

(注)

1. 『島根県埋蔵文化財調査報告』等Ⅱ集、島根県教育委員会、1970年
2. 「大田市内の遺跡遺物」（蓮岡法暲『大田市誌』所収）大田市、1968年
3. 注1.に同じ。

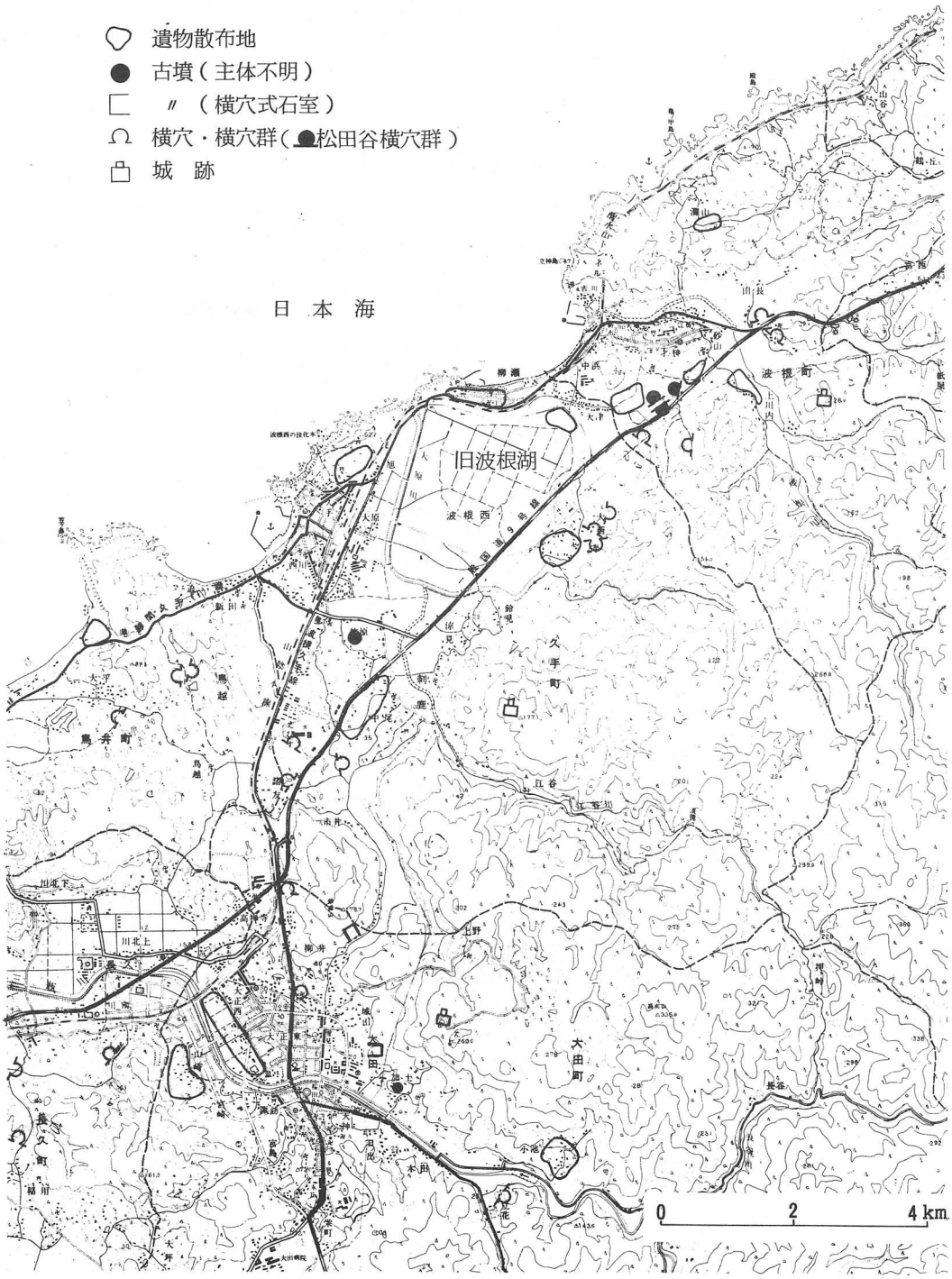


図 2　　周辺の遺跡分布図（ 1 ： 10, 000 ）

Ⅲ　横穴群の概要

横穴群は前回の調査分をあわせると４支群15穴を数えることができる。Ⅰ群は１～４号穴までが近接し、５号穴がいくぶん離れて位置する。南ないし南東に向いて開口する。Ⅱ群は１～５号穴が近接し、６、７号穴が低い位置にある。いずれも北ないし北西に開口する。Ⅲ群は２穴からなり、ほぼ南向きに開口する。Ⅳ群は１穴からなり独立的である。低い位置にあって南向きに開口する。調査した横穴は下図のような位置関係にあるが、これ以外にも若干存在した可能性がある。（特にⅣ群についてその可能性が強い。）

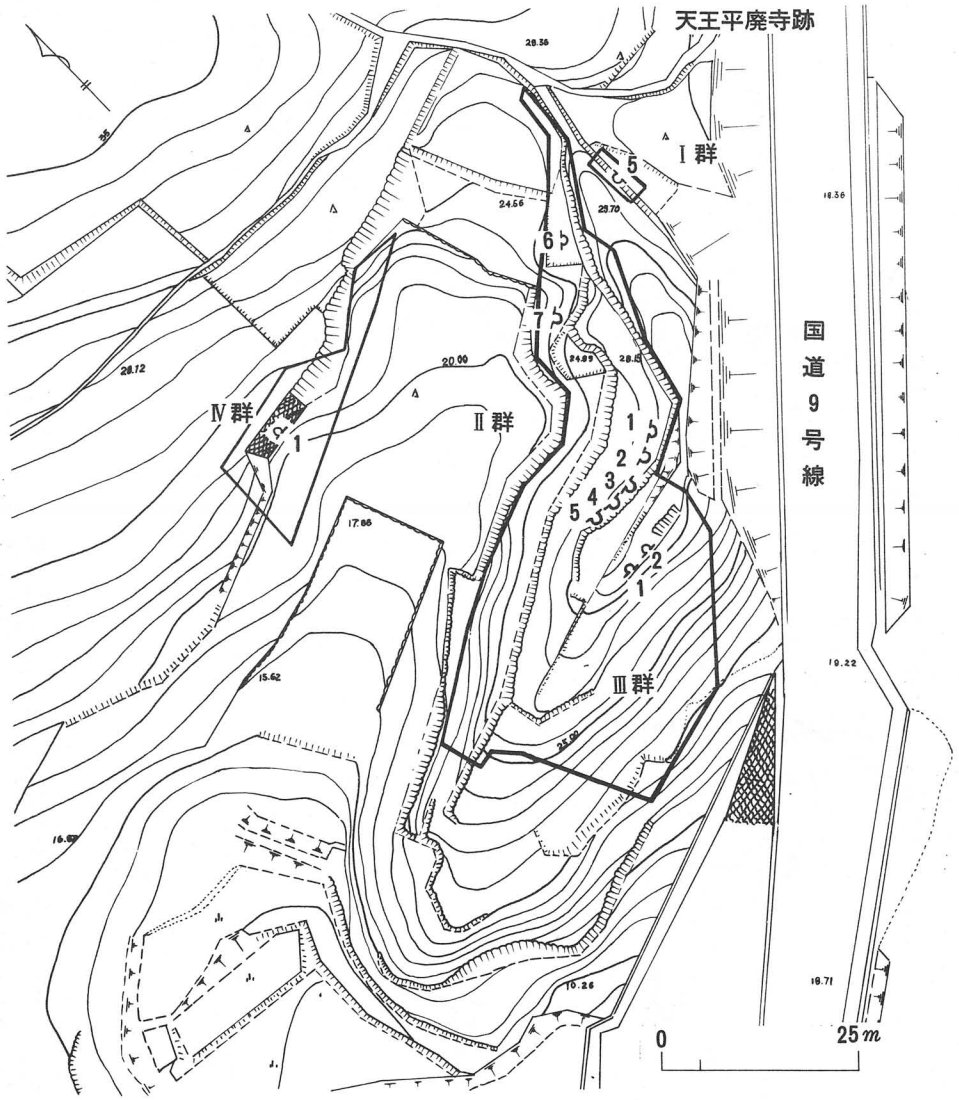


図３　　横穴群分布図

Ⅰ　群1号穴（'69年調査）

この横穴は第Ⅰ群のうち東端にある。かろうじて玄室だけが残っている。凝灰岩質の岩盤に堀られている関係で、保存はよい。プランは不整な方形を示しわずかに胴張りがあって羨道との区別が明瞭でない形式のようである。断面は丸天井形式を示しているが、奥壁部の高さは３０cm内外という低さで、プラン、掘穿の技術などすべての点においてきわめて粗雑な造りである。主軸はほぼ北西－東南に向け東南側に開口している。玄室の長さ１８０cm、中央の幅１９６cm、天井部の高さは８６cmをはかる。なお、奥壁に近い床面に掘穿時のノミ痕が残っている。ノミ痕の幅2cm前後である。また、羨道側が一段下がっているのは後世の石切りによったものである。遺物はない。

Ⅰ　群2号穴（'69年調査）

第1号穴の西側に1.8m離れて掘られているが、いまは玄室の奥壁からわずか７４cmしか残っていない。床面のレベルは第1号穴と同じで標高24.65mをはかる。プランは不整の正方形であろうか。天井は丸天井である。残存部の最大幅230cm。高さ105cmを有する。主軸の方向は北西－東南に向けている。玄室前半から前庭部にかけては不明である。遺物は認められなかった。

Ⅰ　群3号穴（'69年調査）

北々西から南々東に向けて開口しており、玄室だけが残っている。プランは不整円形に近いもので、天井は低い丸形を呈す。床面の西側に幅5cm、深さ１４cmの溝が掘ってある。残存部の長さ２０７cm、最大幅２０３cm、天井の高さは１００cmあり、羨道部の側は一段低くなって９２cmをはかる。床面の高さは標高25.38mある。遺物は認められなかった。

Ⅰ　群4号穴（'69年調査）

第3号穴の西側1.8m離れてある。玄室だけが残っており、第Ⅰ群のなかでは最も整備された横穴である。すなわち、プランは正方形を示し、床面の中央がわずかに凹む。壁面の立ち上りは７０～６０cmまで直立し、天井部は家形に近い平形を示す。残存部の長さ200cm、副230～225cmで、奥壁が広くなっている。高さは125cmで平入りの形式であろうか。床面の標高は24.71mある。これまた遺物はない。

（以上は『島根埋蔵文化財調査報告』第Ⅱ集をもとに作製した。）

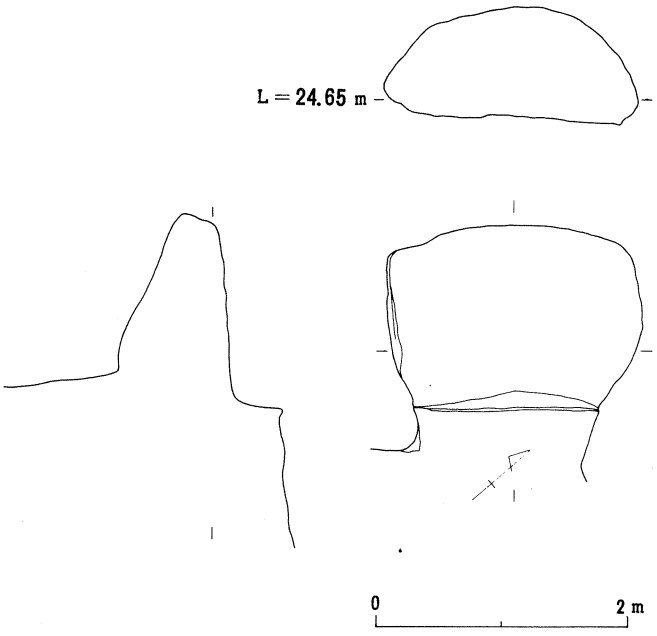


図 4　　Ⅰ群 1 号穴実測図（ 1／60 ）

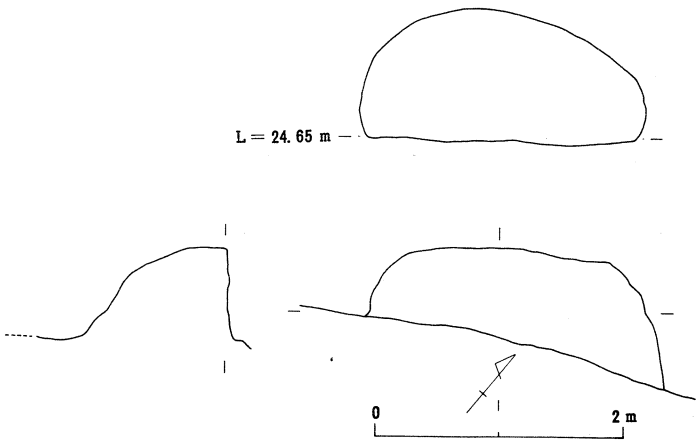


図 5　　Ⅰ群 2 号穴実測図（ 1／60 ）

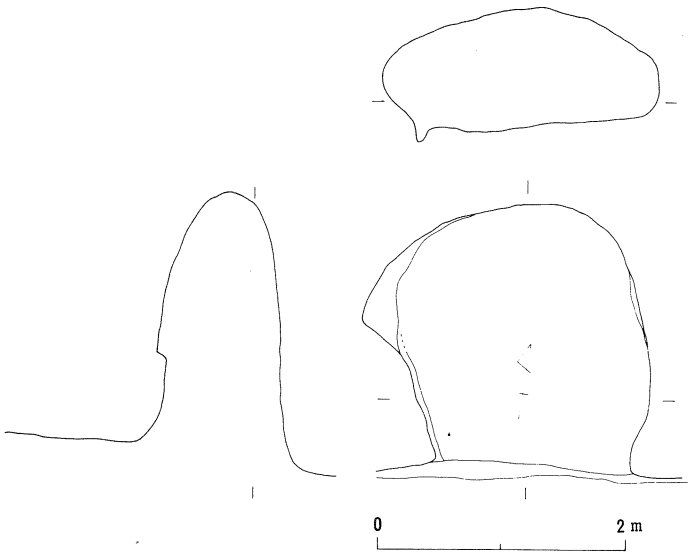


図 6　　Ⅰ群 3 号穴実測図（ 1/60 ）

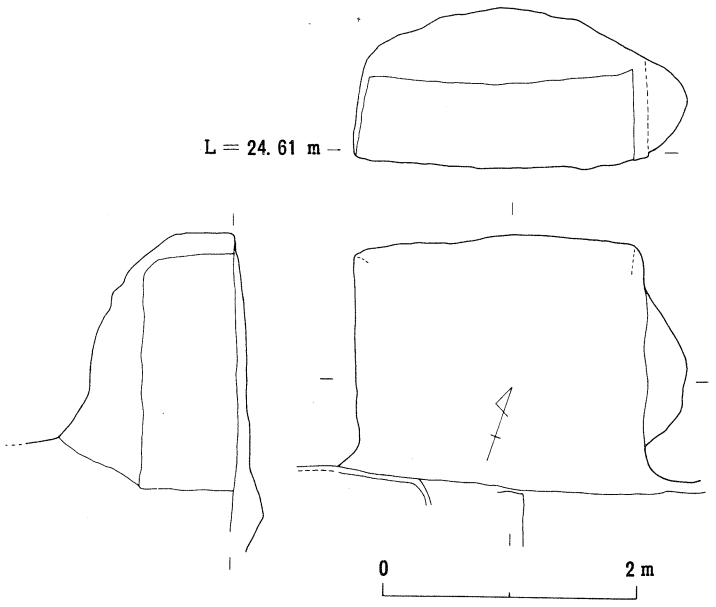


図 7　　Ⅰ群 4 号穴実測図（ 1/60 ）

Ⅰ　群5号穴（'79年調査）

Ⅰ群の最南東端、1～4号穴とは若干離れた位置に存在する不整形丸天井型横穴である。

後世の攪乱や二次的加工を数度にわたって受け、横穴自体もかなり損壊しており、遺物も全く検出できなかった。

横穴は平面不整形で隅も十分に加工されない方形に近いもので、立面も十分に加工されず、丸天井のようであるが天井は大部分を失なっているため判然としない。羨道部も削り取られており、不明である。玄室の規模は長さ190*cm*、幅280*cm*、高さ100*cm*程である。排水溝は認められなかった。

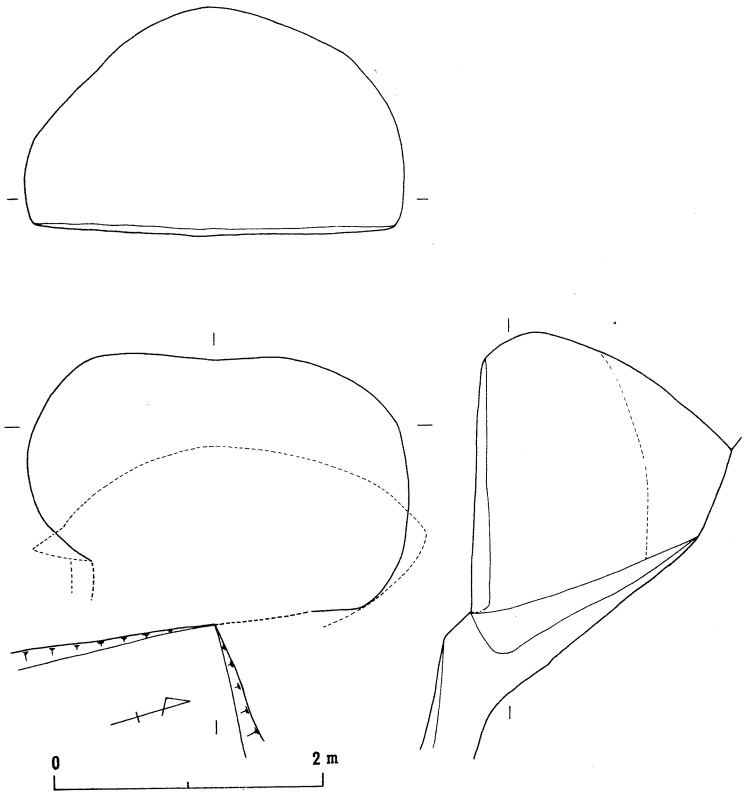


図8　　Ⅰ群5号穴実測図（1/60）

Ⅱ　群1号穴（'69年調査）

Ⅱ群のうちでは最も高い位置にあって床面の標高は28.89 mある。調査した横穴群のうちで最も保存度のよい横穴である。主軸はほぼ東南－北西におき北西方向に開口している。玄室のプランは奥壁の側が広い梯形を示し、天井部は前半部が落下しているが丸形である。平入りの形式である。その規模は奥行２６５cm、奥壁の幅３８０cm、前側の幅は約３２０cmをはかり、天井の高さは中央で180cmである。羨道部は長さ５０～３５cmとごく短く、幅は８５cm前後である。また、羨門部には閉塞装置用の掘りこみがある。前庭部は床面だけが残っているが、長さ２５５cm、幅１４５～１２０cmあって中央が狭くなっている。なお、玄室の前端から前庭部の中ほどにかけて浅い排水溝があり、それより先は傾斜が変って先端は一段をつくっている。

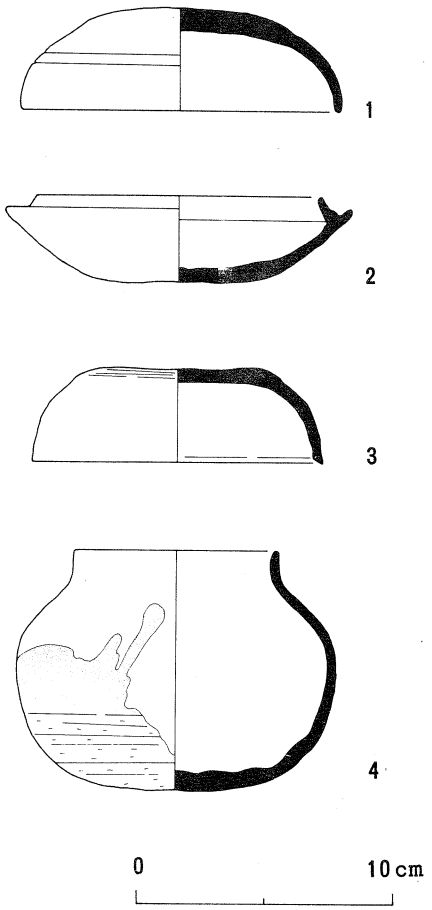


図9　　Ⅱ群1号穴出土遺物実測図（1/3）
（近藤　正　原図）

この横穴における遺物は、前庭部に認められた一群の須恵器である。すなわち、排水溝の先端に須恵器坏蓋と坏が２枚逆転しており、さらにそれより約６０cm離れた位置に須恵器坏身が認められた。

Ⅱ　群2号穴（'69年調査）

横穴の前半分ほどを後世の石材切出しに際して失なっており、９号線バイパス工事に伴ない発掘調査が行なわれたものである。

平面は隅丸方形を呈し、奥壁中ほどから壁との境界に沿い７～８cmの断面方形の溝が羨道部にかけてめぐっており、おそらく羨道部へ連がっていたと推定される。立面形は壁の立上りが内湾気味で、天井も平天井を意識しているものの十分にその加工が認められない。

規模は奥行２５０cm（復原）、幅２９０cm、高さ２００cmほどである。遺物は検出されていない。（以上は『島根県埋蔵文化財調査報告』第Ⅱ集をもとに作成した。）

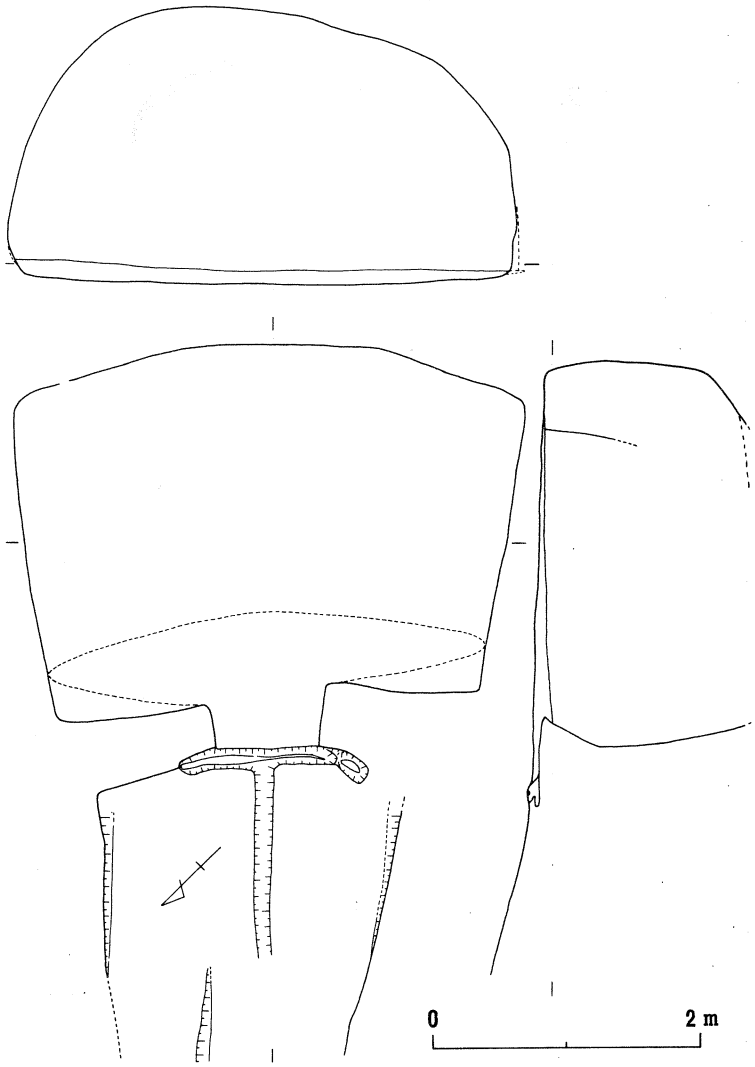


図１０　　Ⅱ群１号穴実測図（１/60）

Ⅱ　群３号穴（'79年調査）

２号穴から８ｍ西にあり、羨道の一部を残し、玄室の比較的良く残存する横穴である。人骨出土。

横穴の規模は玄室長さ250cm×幅330cm（奥）、260cm（前）、高さ60（奥）～100cm（前）、羨道長40cm、幅70cm、前庭長120cm（残）、幅130cmほどで、平面は奥にむかっていくぶん開く不整方形である。玄室中央から羨道を通り、前庭まで排水溝が認められる。羨門部には入口蓋の受け部となるくり込みが認められる。天井は低く壁はかなり直立に近い、いわゆる平天井形式のもので、奥壁には壁と天井の界線がおぼろげながら

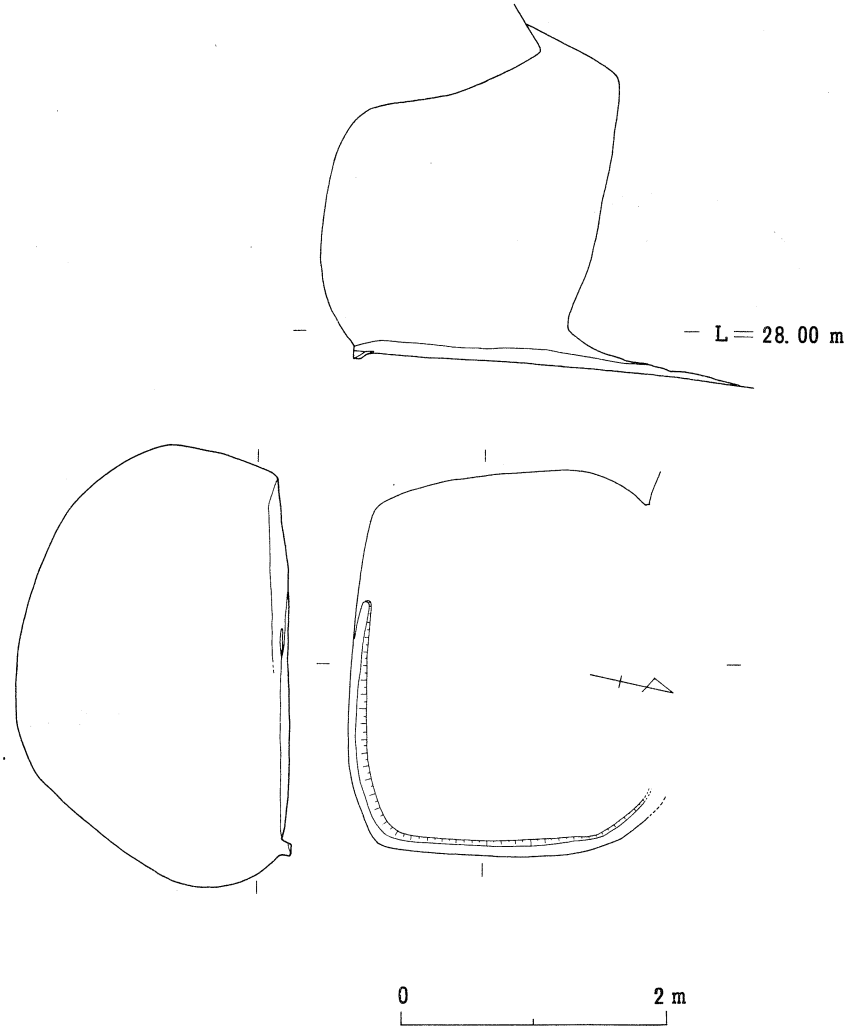


図１１　　Ⅱ群２号穴実測図（ 1/60 ）

認められる。床面はほぼ水平に近いが、排水溝に向け多少下がる傾向が認められる。

内部は後世の攪乱や松根によってかなり乱されており、直接の関連性が薄い人頭大の石も散乱している。人骨もかなり動いているが、奥壁に接する位置にきちんと揃えられた一群とその手前の平行におかれた２個の骨片は旧状を保っているものと判断された。

遺物は散在しており、土砂の流入によってほとんどが動かされたものと考えられる。人骨をきちんと並べ直していることから複数回にわたる埋葬が行なわれたと推定される。耳環も大小あって４個存在することはその裏づけとなる。

遺物は下にかかげるものがすべてで、須恵器の量が少ないことが指摘される。また装身具

として耳環が２対、石製紡錘車が１個検出された。

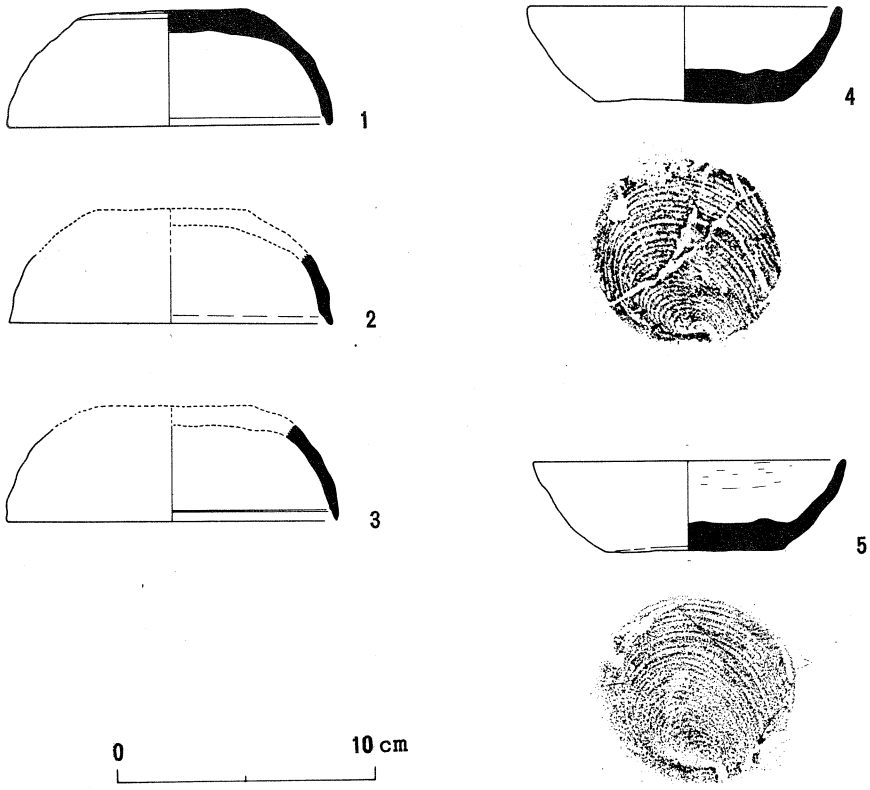


図１２　　Ⅱ群３号穴出土遺物実測図（１/３）

Ⅱ　群４号穴（'79年調査）

３号穴の西５ｍはなれて３号穴とほぼ同レベルに存在し、天井部をほとんどすべて欠失した横穴である。

横穴は北向きに開口し、玄室は南西隅が拡張された平面形を呈する。本来のプランは奥行２００cm（２７０～２００cm）、幅２９０cm、高さ１１０cmほどと推定される。

後世に攪乱を受けたうえに土砂が流入し、また松根が入りこんでいて大半の遺物は二次的に動いており、特に奥壁付近と東半分は後世の土師質土器が床面にまで達して検出されている。須恵器・鉄器共に北西４分の１部分に集中し、勾玉・耳環・紡錘車はほとんど壁

に接して検出された。

玄室の各隅は比較的丁寧に加工され、床面には主軸方向にノミ痕が無数に残っている。

羨道部は短く、幅６０cm、奥行３０cmほどで、羨門部には閉塞用のくり込みが認められ、その底は前庭部へ続く排水溝につながっている。

前庭部は残存が良くないが、幅２００cmほどで直線的にのびるものと推定される。

天井部は欠失していてよくわからないが、残存部の状況からして、比較的整った平天井を呈するものと推測される。

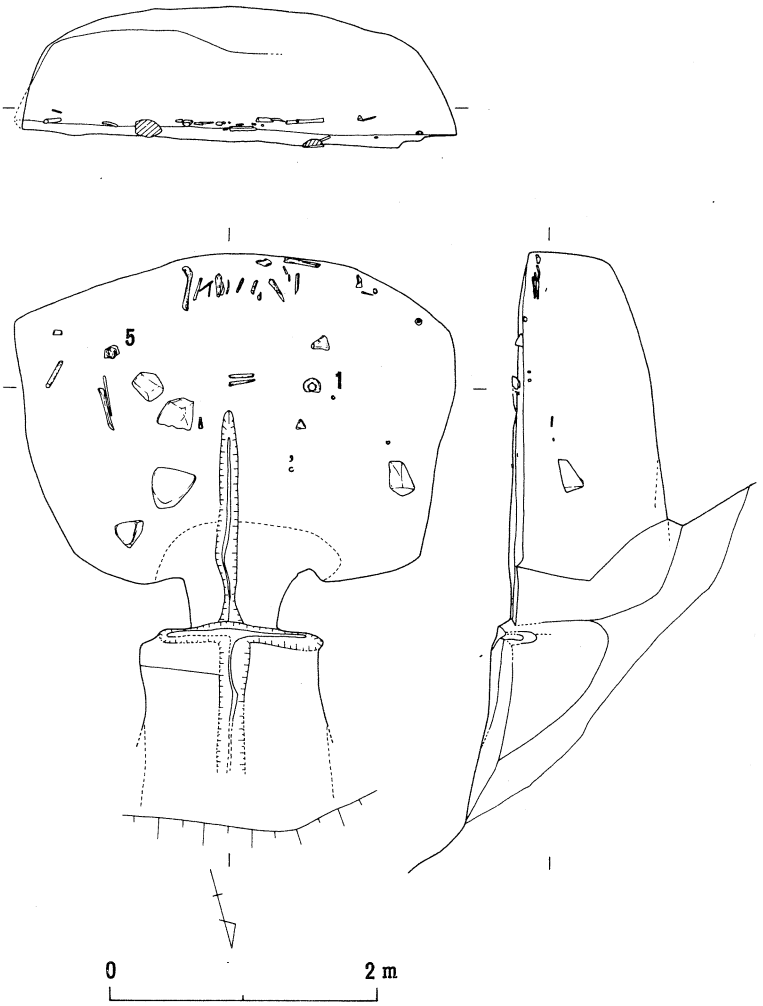


図１３　Ⅱ群３号穴実測図（1/60）

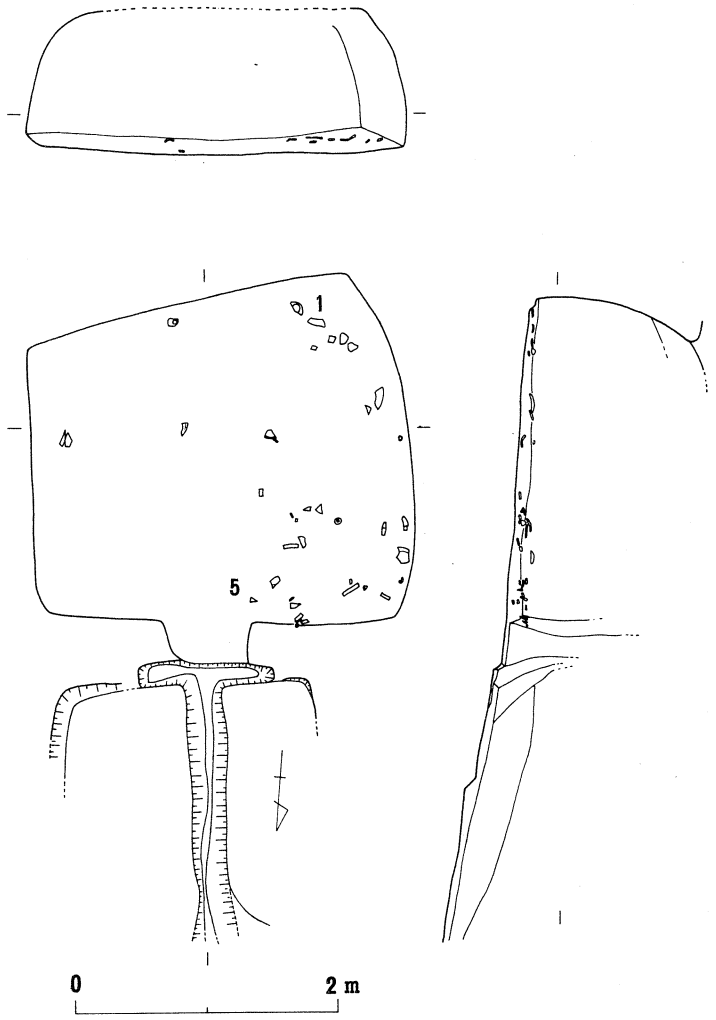


図１４　Ⅱ群４号穴実測図（ 1/60 ）

Ⅱ　群５号穴（'79年調査）

後世の石切出しによりその大半を失なっているがⅡ群中最も整った横穴である。

玄室は壁をほとんど欠いているが北東側に僅かに残る天井部からほぼその全形をうかがうことができる。床面は長方形で奥行１７０*cm*に比し幅が２４０*cm*と長く、本横穴群中では異色である。各隅や床面は丁寧なノミ痕を残し、きちんと仕上げられている。玄室中央部には奥壁のすぐそばから排水溝が設けられ、玄室の２倍ほどの長さ（３１０*cm*）をもって斜面に通じている。両側壁はほぼ直立するがかなり低く（７０*cm*）、平天井を呈す天井部とは直角に交わって界線をなす。

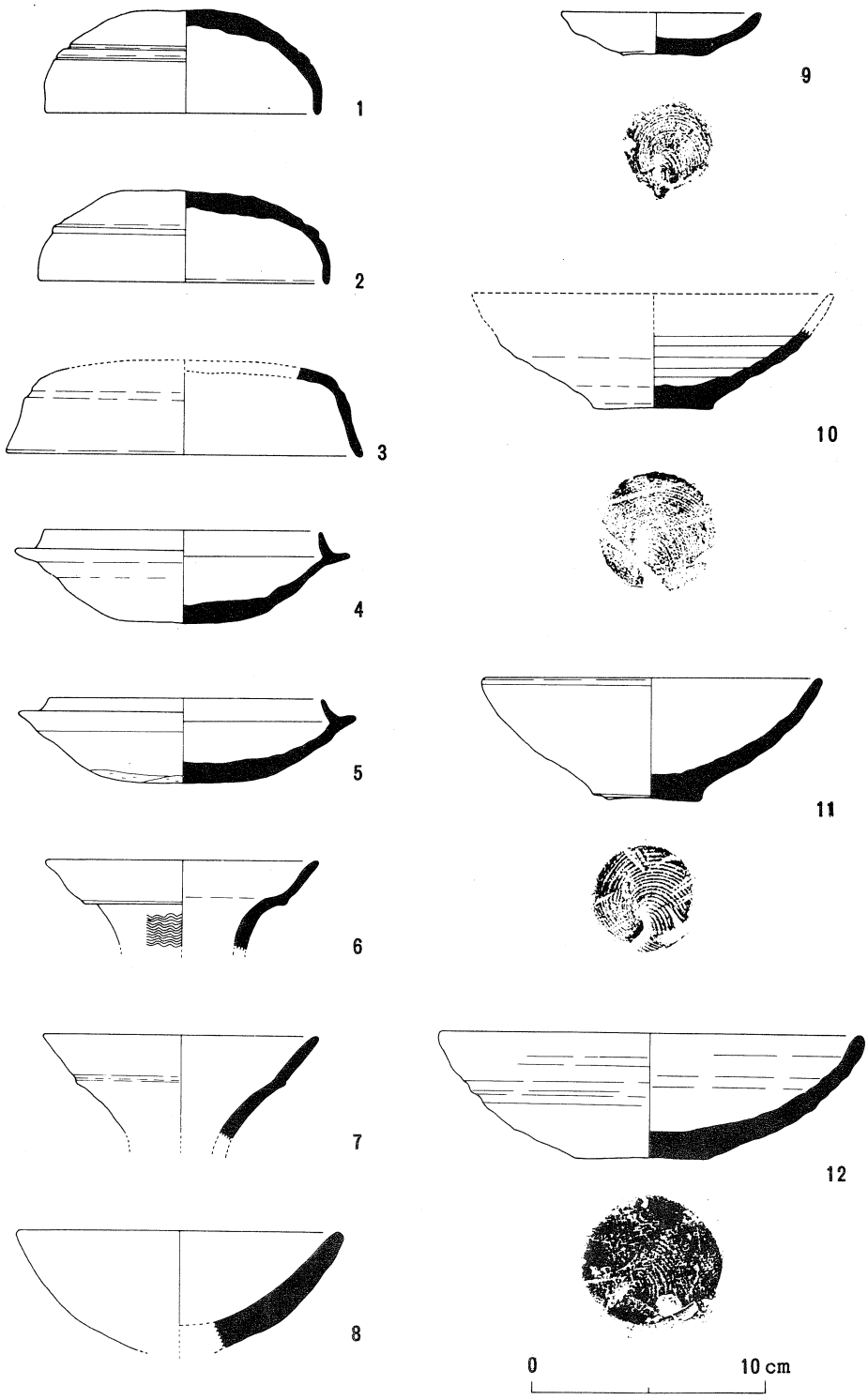


図１５　　Ⅱ群４号穴出土遺物実測図（１：1／3）

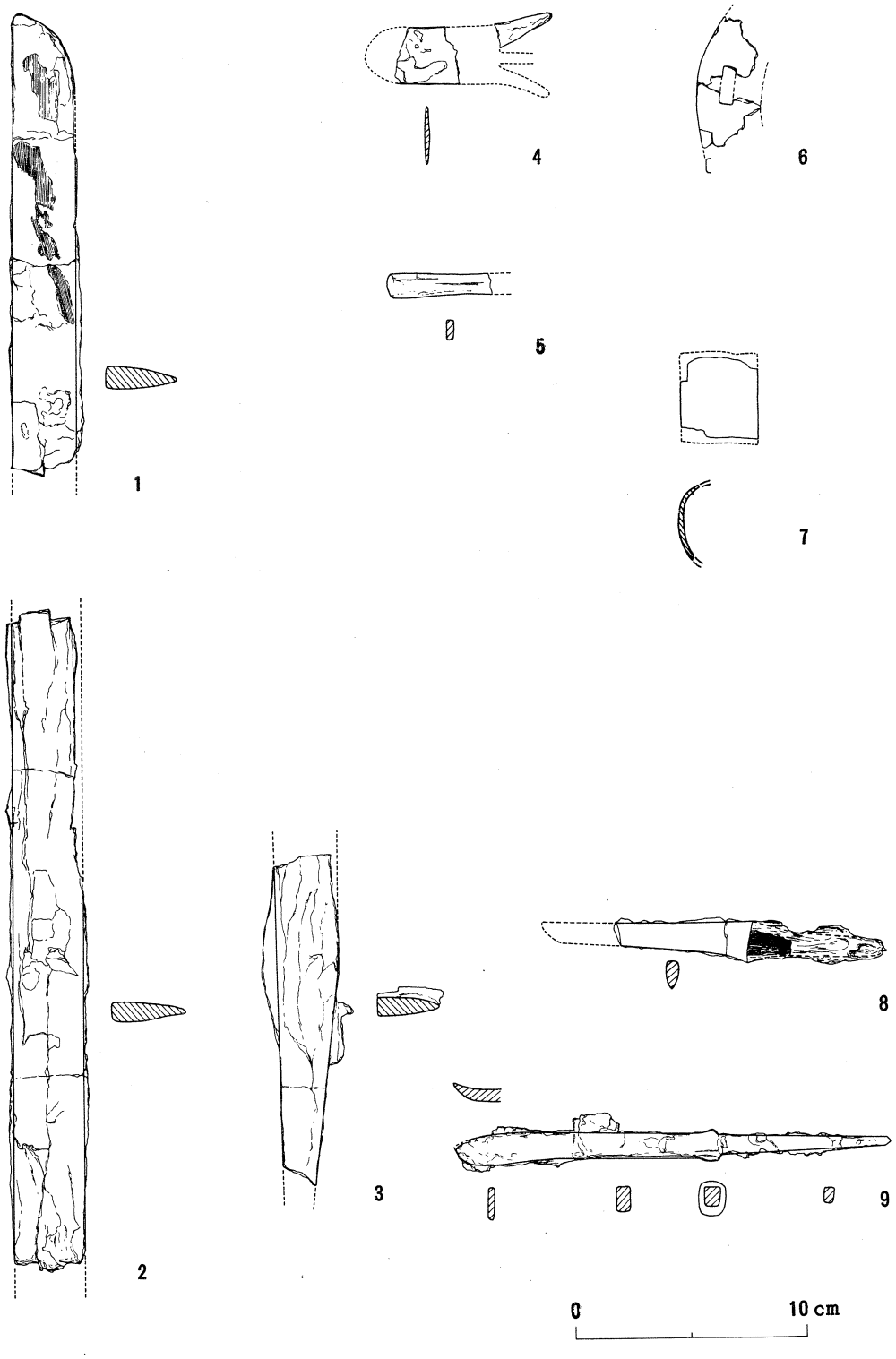


図１６　　Ⅱ群４号穴出土遺物実測図（２：1／3）

遺物はほとんどが床面直上で検出され、上面を削られてはいるが副葬品の大半は失なわれていないものと思われる。玄室内の石はおそらく閉塞石であったと考えられ、いずれも円石で、海ないし海に近い川において見られるものである。須恵器は玄室南西隅、中央部、東隅に数個ずつかたまっており、中央部の蓋には刀子が入れられていた。また東隅では土師器甕片が出土している。

玄門、羨道部は完全に削られていてまったく不明である。

出土土器は須恵器１１個体、土師器２個体分で、須恵器では蓋坏の蓋が大半を占める。蓋坏の蓋は天井部と口縁部の境にやや鈍化した稜を残し、天井部の大半をヘラ削りにより成形されたもの（図１８－３～５）、ヘラ削りの少ないもの（図１８－２、６）と稜を有さず、ヘラ削りもごく一部にとどまるもの（図１８－１）が認められる。坏は大小各１個体分が認められる。

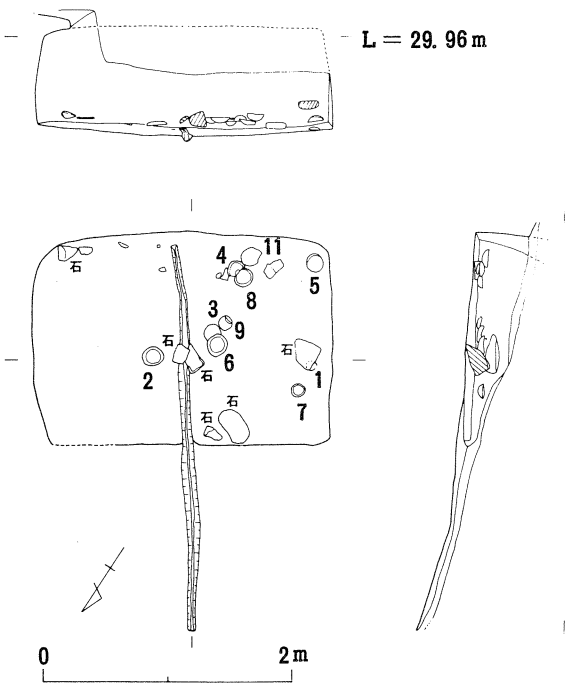


図１７　Ⅱ群５号穴実測図（1/60）

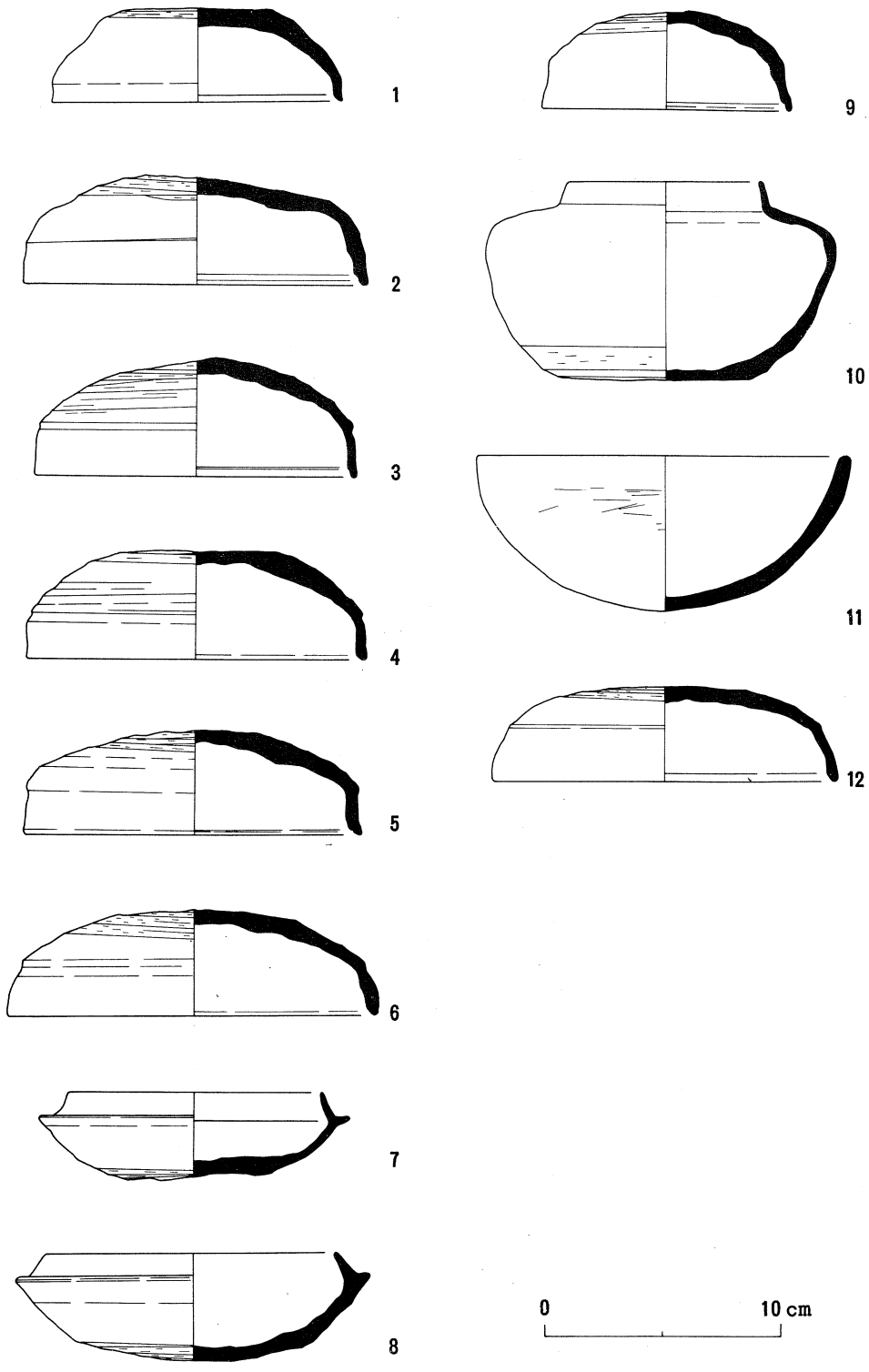


図１８　　Ⅱ群５号穴出土遺物実測図（ 1／3 ）

Ⅱ　群6号穴（'79年調査）

Ⅱ群の最東部に位置する不整方形、平天井様の横穴で一括遺物を出土している。

横穴は前庭部を削平されており、内部も羨道付近をのぞいて盗掘されたもののようである。平面形は各隅を十分にくり込んでおらず、楕円形に近い隅丸方形を呈している。壁も十分に直立しておらず北東壁は床から天井へゆるやかな曲線を描いているが、南西壁はやや直立し、不明瞭ながらも界線ができている。奥壁も同様であるが一応平天井様の加工を施したようにみえる。床面は若干前に傾くが、排水溝は認められない。玄室床面も十分に平担な加工を施されていないのがその高低差から窺える。

遺物の大半は盗掘により大半は持ち出されたようで玄室の中央部周辺にも一片も発見できなかったが、推積土断面の観察により掘残されたと考えられる玄門部に須恵器・土師器が一括して供献された形で検出され、やや西側には刀子片が残されていた。

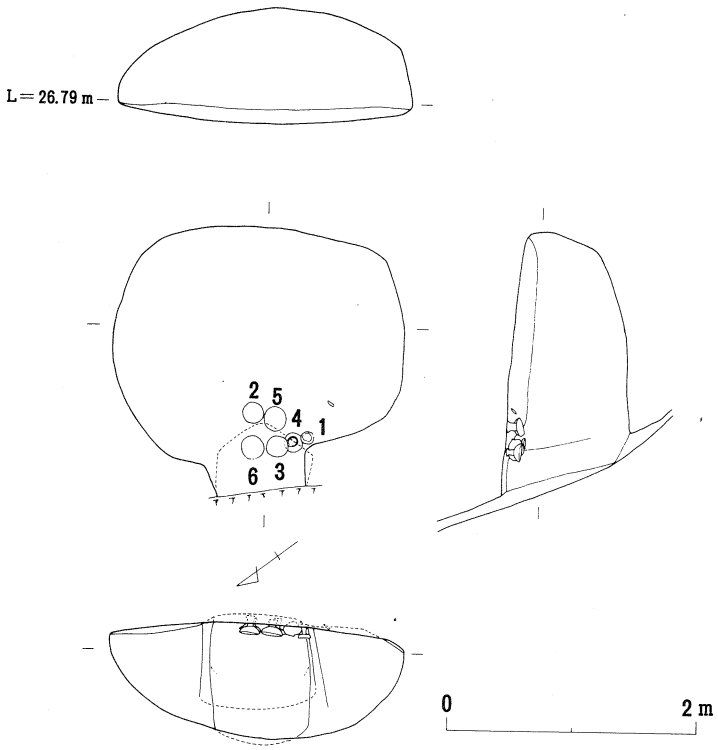


図１９　　Ⅱ群６号穴実測図（ 1/60 ）

須恵器高坏は坏部分に焼ひずみが認められ、坏部外面に稜を残し、脚部中央には２条の凹線をめぐらす。脚部にはスカシ窓が刻まれず、脚端部内面は偏平で安定感のある小型品である。坩（短頸壺）は肩が良く張り、体部から底部にかけて広くヘラ削りを行っている。底部は肥厚し、外面は湾曲して不安定である。土師器高坏は口径、器高には大差がない。口唇部はまっすぐ外方にのびる（図２０－２）、外反する（図２０－３、５、６）ものがあり、脚部外面をハケ目調整するもの（同３、５）、ヘラで削るもの（同２、６）が認められる。

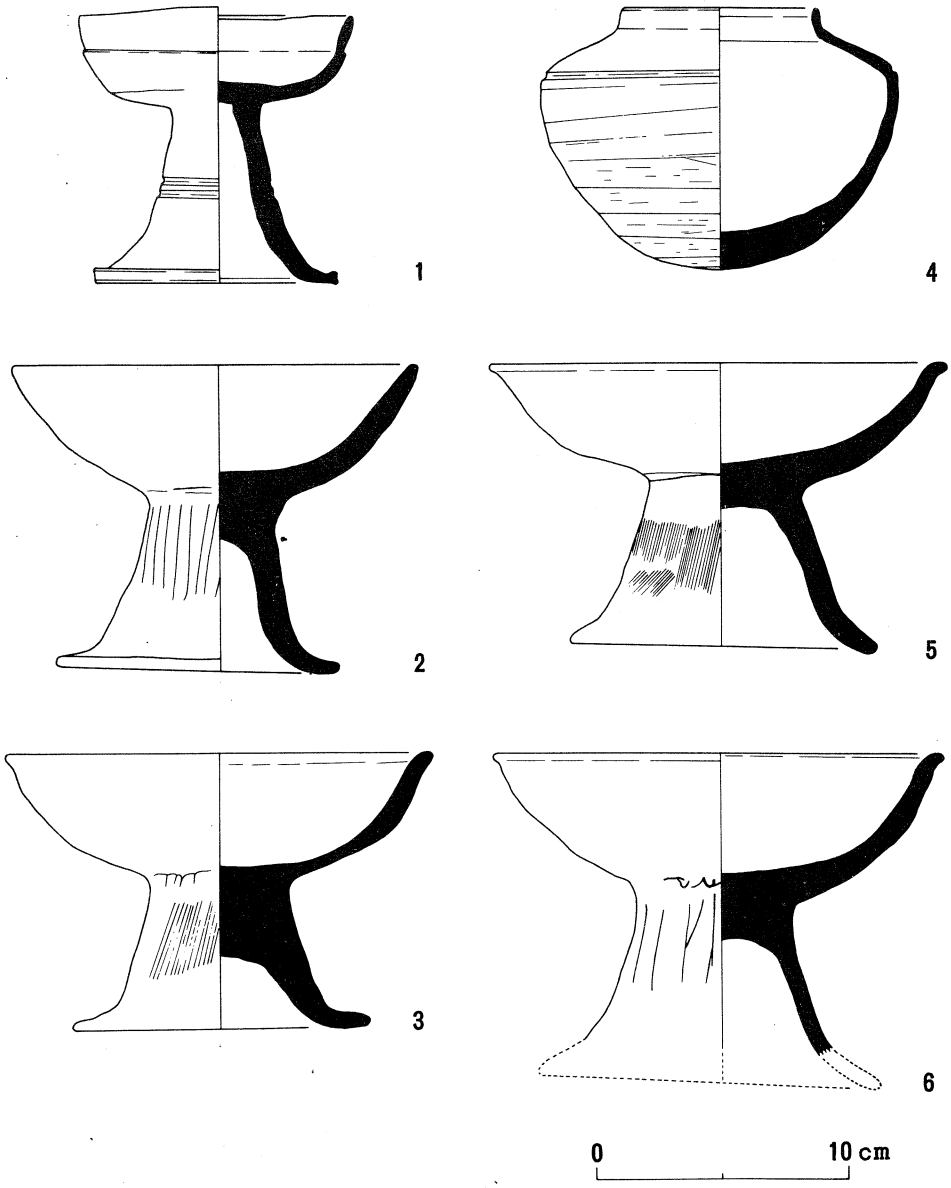


図２０　Ⅱ群６号穴出土遺物実測図（１/３）

Ⅱ　群７号穴（'79年調査）

Ⅱ群の下段、６号穴に近接する不整長方形横穴で一部が開口していた横穴である。

玄室は十分に加工が施されておらず、特に西壁は中途でその掘り込みを中止したようである。奥行（２２０cm）が幅（１３０cm）よりも相当長い。奥に細長い平面形を呈し、中央部付近から前底部にかけ排水溝が設けられ、特に中央部はくぼみのようになっている。玄門部の西隅は十分にくり込まれておらず、いくぶんなだらかに羨道に続き、羨道も当群中ではやや長いほうに属する。（４０cm）。西側壁は十分に直立していないが、西壁はいくぶん直立する。天井は丸みをおびているが、全体としては平天井を意識したものといえる。

羨門部には閉塞用のくり込みが設けられ、板状の閉塞装置があったことが知られる。前庭部は東側を欠いているが２００cm以上存在したものと推定される。

遺物は堆積土中から須恵器坏片(図21—2、3)が、床直上から蓋、耳環、脚付盌が検出され、その位置はいずれも玄室中軸線付近である。

須恵器蓋坏の蓋（図２１－１）は外面をすべてナデにより仕上げており、坏も底部にヘラ切未調整の痕を残す。（図２１－２、３）いずれもやや小型品である。脚付盌は坏部がゆるやかな曲線を描くと同時に口唇部よりも下に最大径が測れる。脚は外方に八の字状にのび、安定感がある。

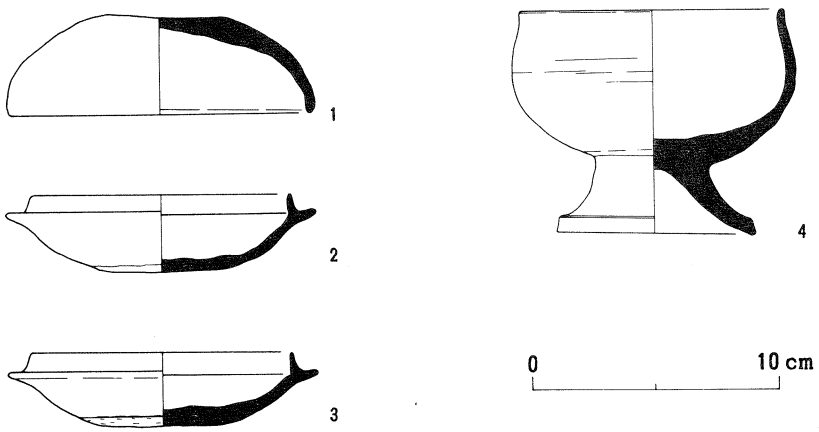


図２１　　Ⅱ群７号穴出土遺物実測図（1/3）

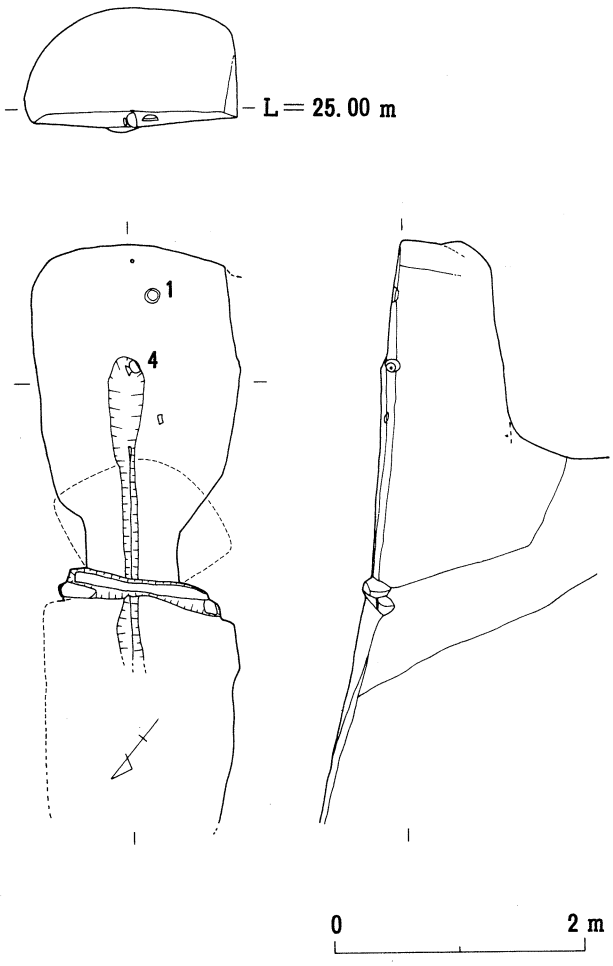


図２２　　Ⅱ群７号穴実測図（ 1／60 ）

＜松田谷横穴群出土の耳環・玉類＞

耳環はⅡ群３号穴からの５個を最高にⅡ群４号穴で２個、Ⅱ群５号穴、Ⅱ群６号穴、Ⅲ群１号穴で各１個が、またⅡ群２号穴と同３号穴の間で１個が表採されている。大小があって、対をなすことが明らかなものは２セット４個である。（一覧表参照）

勾玉はⅡ群３号穴、同４号穴から出土しており、いずれも赤茶色を呈し、一方から穿孔しているが、他方には割れ防止のくり込みをもうけている。紡錘車は外面に鋸歯文を施し複雑な文様構成を示す。Ⅱ群３号穴出土品（図２３－１１）は底面にも文様を施している。

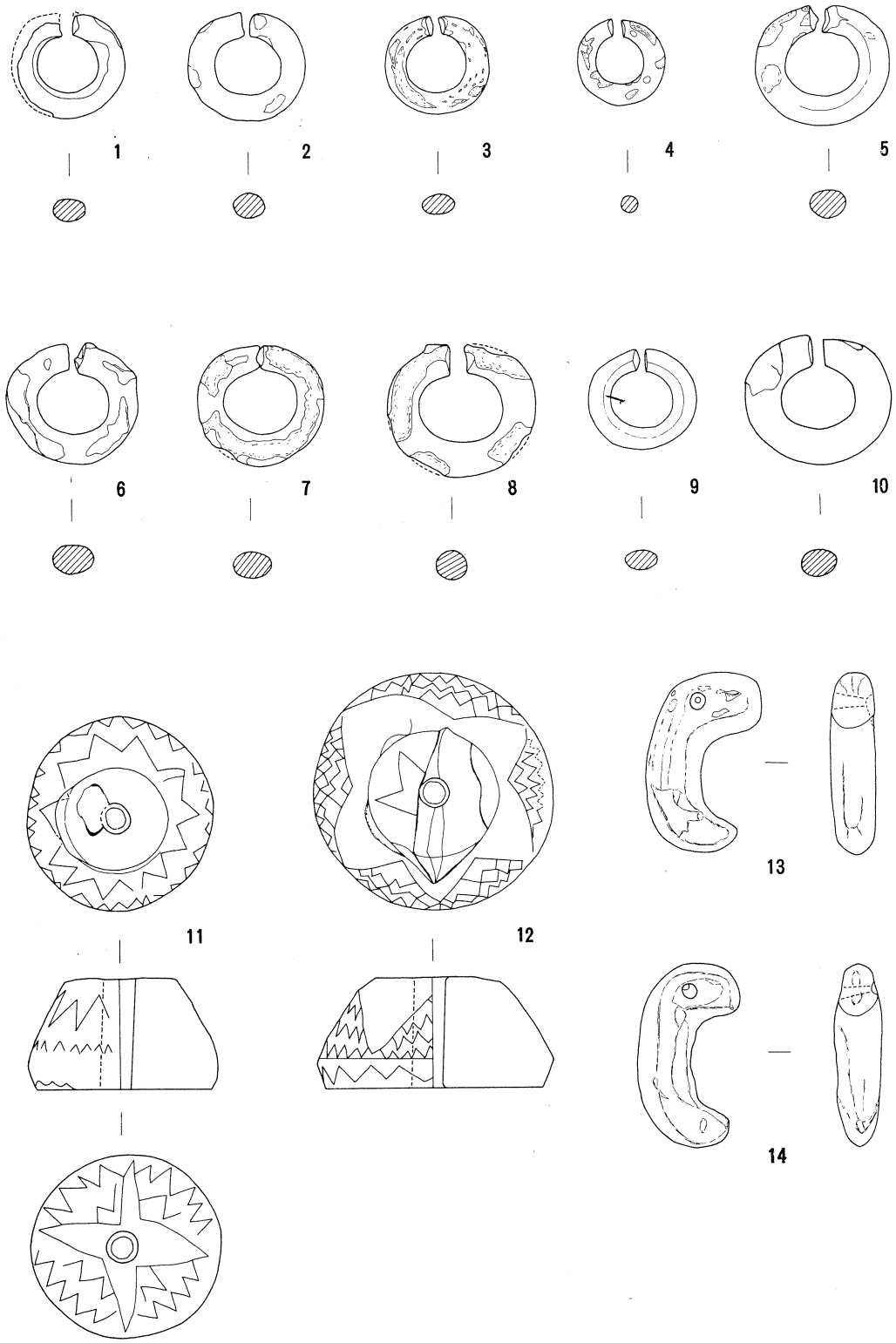


図２３　耳環・玉類実測図（２／３）

松田谷横穴群出土耳環・玉類一覧表

図２３－１	Ⅱ群３号穴。2、9と同大。	図２３－　８	Ⅱ群５号穴。１０と同大。
－２	Ⅱ群３号穴。１とセット。	－　９	Ⅱ群６号穴。残存良好。
－３	Ⅱ群３号穴。	－１０	Ⅲ群１号穴。重量感あり。
－４	Ⅱ群３号穴。残存良好。	－１１	Ⅱ群３号穴。やや硬質。
－５	Ⅱ群３号穴。重量感あり。	－１２	Ⅱ群４号穴。軟質。
－６	Ⅱ群４号穴。７とセット。	－１３	Ⅱ群３号穴。 } 同大。
－７	Ⅱ群４号穴。	－１４	Ⅱ群４号穴。

Ⅲ　群１号穴（'79年調査）

松根により天井部をほとんど欠く横穴で排水溝が十文字に走り、閉塞石が存在する。

Ⅱ群とは尾根をはさんで南側に位置し、２号穴と共にⅡ群１～５号穴とほぼ同レベルの反対方向に開口する。玄室はきわめて不整形で十分なプランの確認ができないほどである。各隅も丸味をおび特に東隅は角ばらずに羨道部へ続いている。中軸線上に幅７～８*cm*、それに直交してやや細く幅４～６*cm*の排水溝が認められ、中軸線上の溝が一段低く掘られている。

遺物は、後世に攪乱をうけたためか散在する傾向を示し、奥壁に接して須恵器坏が、東西排水溝の端近くにそれぞれ直刀片が床直上で、また耳環が中軸線上の排水溝近くの床直上で検出された。

また、後世の土師質土器もあまり高くない位置から出土しており、玄室内の遺物は二次的に動いている可能性もある。

西側壁は充分直立せず、断面形はかまぼこ形を呈する。奥壁もまた同様である。床面も十分に平坦にされていない。

羨道は２０*cm*前後と極端に短く、すぐに前庭部へつながり、前庭部との間に２０*cm*ほどの段差があって、そこへ地山を加工した板石や円礫が閉塞石としてつめられている。前庭は幅がさほど広くはなく（１００*cm*前後）、比較的平坦な床面を有している。

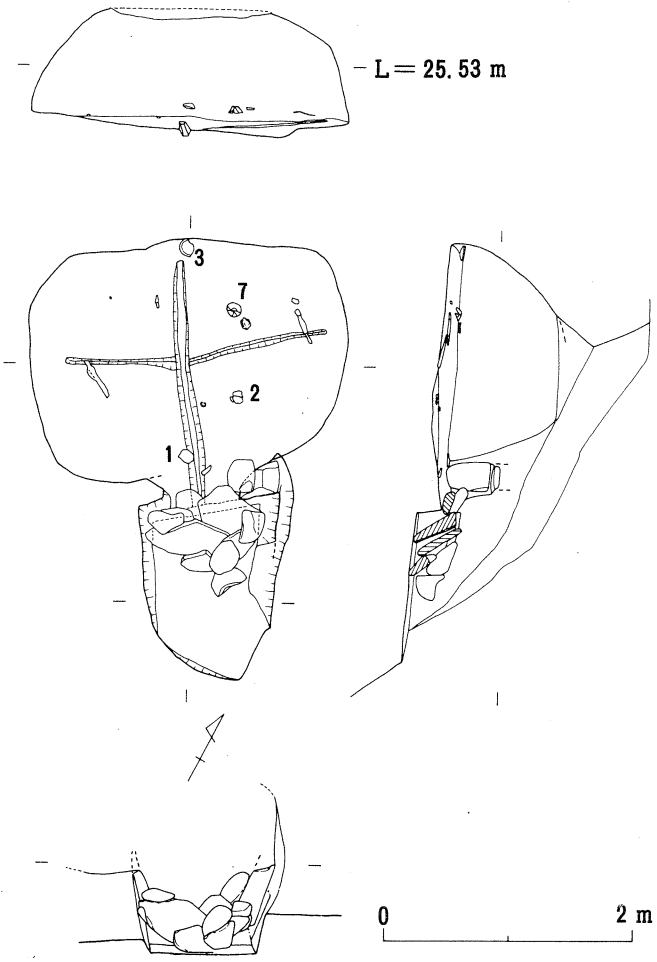


図２４　　Ⅲ群１号穴実測図（１/６０）

出土遺物中須恵器は蓋坏のみが検出された。蓋は天井端部に沈線を施し、ヘラ削りによる凹凸を良く残している。口唇部はやや外方に開き、内側にはわずかながら稜線を残す。坏は底部のごく一部にヘラ削りを施し、内面は凹凸が明瞭である。たちあがりが厚く、内傾するもの（図２５－３、５）と途中から直立し、器壁の比較的薄いもの（図２５－４）の二種類がある。

土師質土器は３個体が検出された。底部内面の指圧による凹凸を良く残し、Ⅱ群３号穴

出土のそれ（図１２－４、５）と類似するもの（図２５－６）と内外面に凹凸を良く残し厚く安定感をもったもの（図２５－７）、それに全形を窺えないが、薄い器壁と外方に直線的に開く口縁部をもち、外面に沈線による文様を施すもの（図２５－８）がある。

鉄器はいずれも直刀で４振を数える。刃先は２振しか残存していないがいずれも丸味を帯びている。大型のもの（図２６－３、４）には目釘穴が認められず、小型品には径３㎜ほどのものが少なくとも１個認められた。

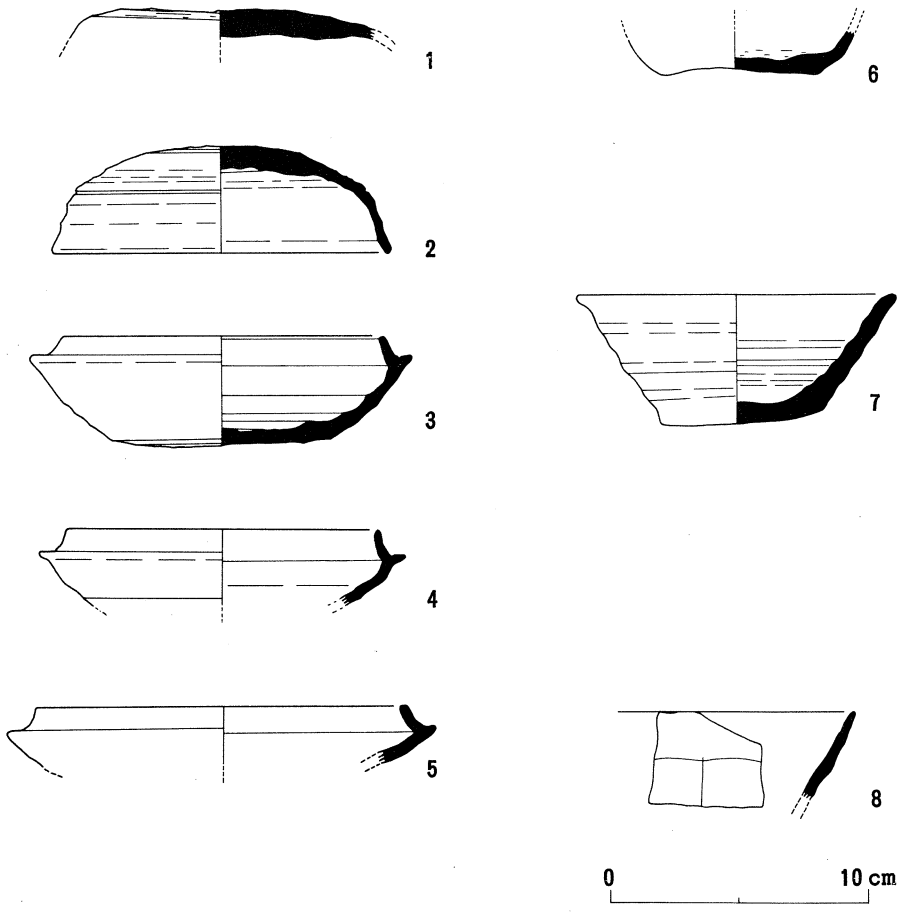


図２５　　Ⅲ群１号穴出土遺物実測図（１：１/３）

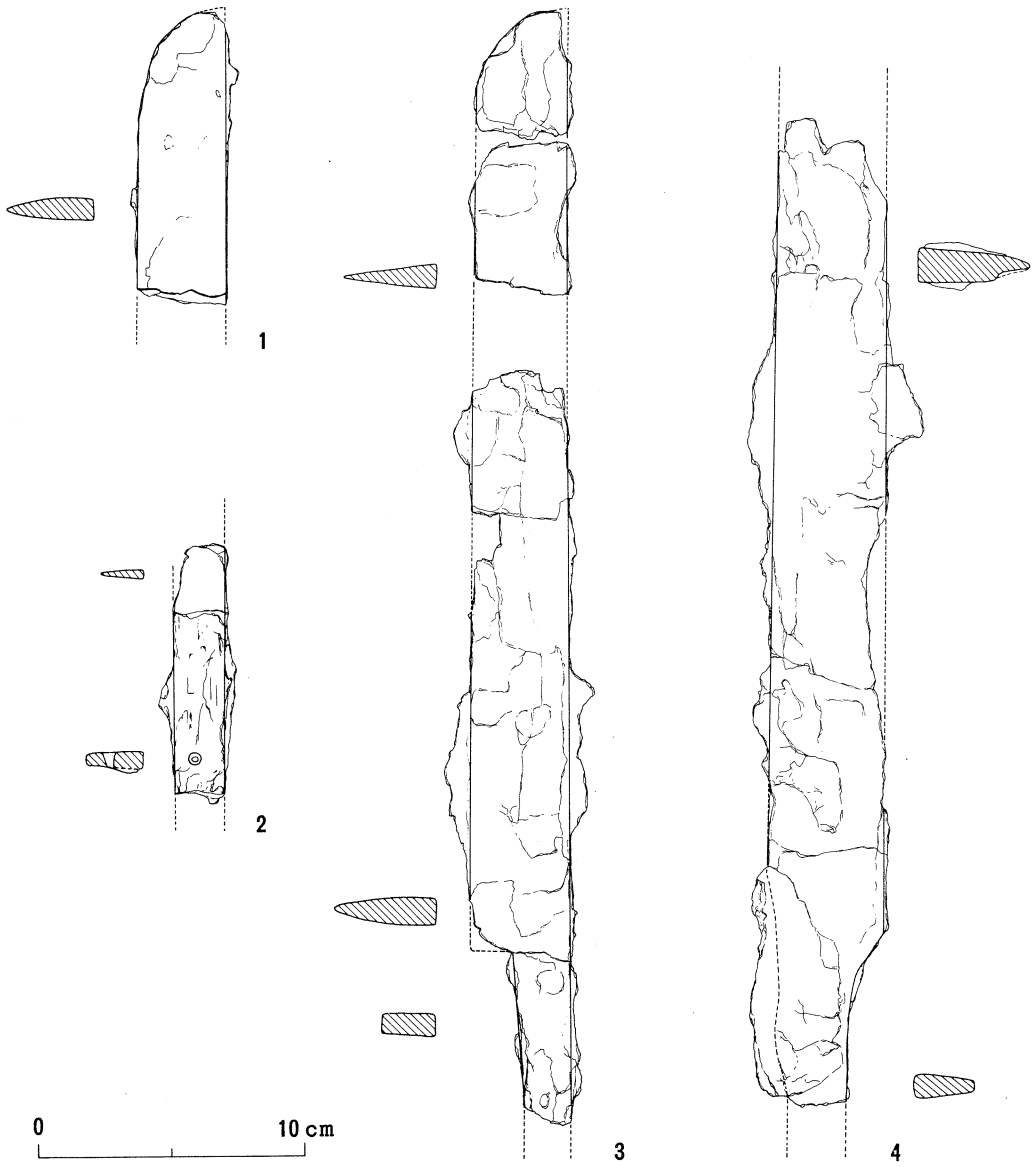


図２６　　Ⅲ群１号穴出土遺物実測図（２：１/３）

Ⅲ　群２号穴（'79年調査）

小型のものであるが一応埋葬遺構と考えられる。崖面を水平に堀り進めたように穿っており、中途に段がある。全長１７０*cm*、幅６０*cm*、高さ１２０*cm*ほどで、図にみるように奥部に地山からなる栗石がつめこまれていた。加工は粗雑で、遺物は検出されなかった。周囲に足をかけたと思えるくり込みが無数に存在する。

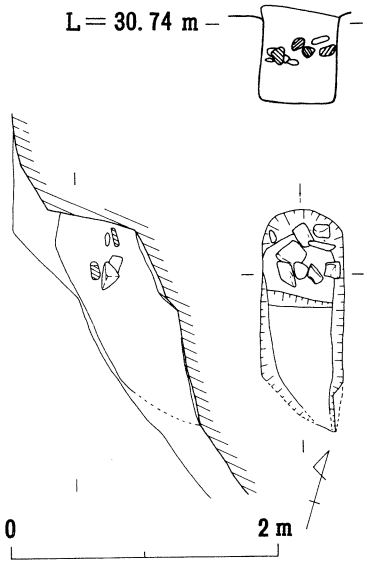


図２７　　Ⅲ群２号穴実測図（ 1／60 ）

Ⅳ　群１号穴（'79年調査）

Ⅱ群の北側、南向きの急斜面に半分ほど残存し、本横穴群中最も整美な横穴で屍床を２つ有する。

後世の採石により玄室の半分しか残していない。開口方向はほぼ真南である。玄室の幅は３５０*cm*ほどあってかなり大型の部類に属する。高さは１５０*cm*ほどで、屍床は幅１３０*cm*をはかるが、長さは不明である。

床はやや羨道方向に下がり、ほぼ平坦である。残存する２隅は丁寧な加工をみせ、ノミ痕もこの部分にのみ残っている。東壁は十分でないが西壁、奥壁はよく直立し、一部には天井、側、奥壁の界線が認められる。後世に何度も攪乱を受けているためか、遺物は検出できなかった。

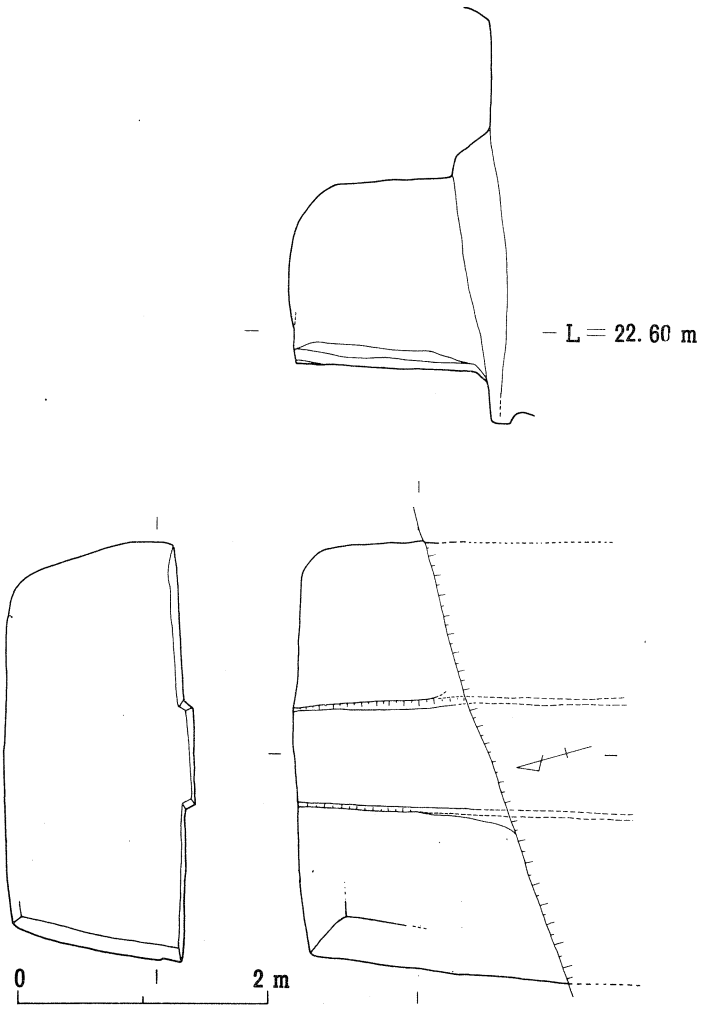


図２８　　Ⅳ群１号穴実測図

表面採集された遺物

表面採集された遺物について、その位置を明らかにしておく。**1**～**3**の須恵器、**6**の砥石、**7**の耳環はⅡ群の斜面で表採された。**4**、**5**、**7**の須恵器はⅣ群１号穴の南側堆積土中で表採された。

同上の表採品と遺構との関係は直接窺うことはできないが、**3**はⅡ群５号穴付近、**6**はⅡ群３号穴前庭部北側、**7**はⅡ群２号穴と同３号穴の中間部で表土中に含まれており、Ⅲ群１号穴、Ⅱ群５号穴出土の耳環（図２３－８、１０）と同大である。

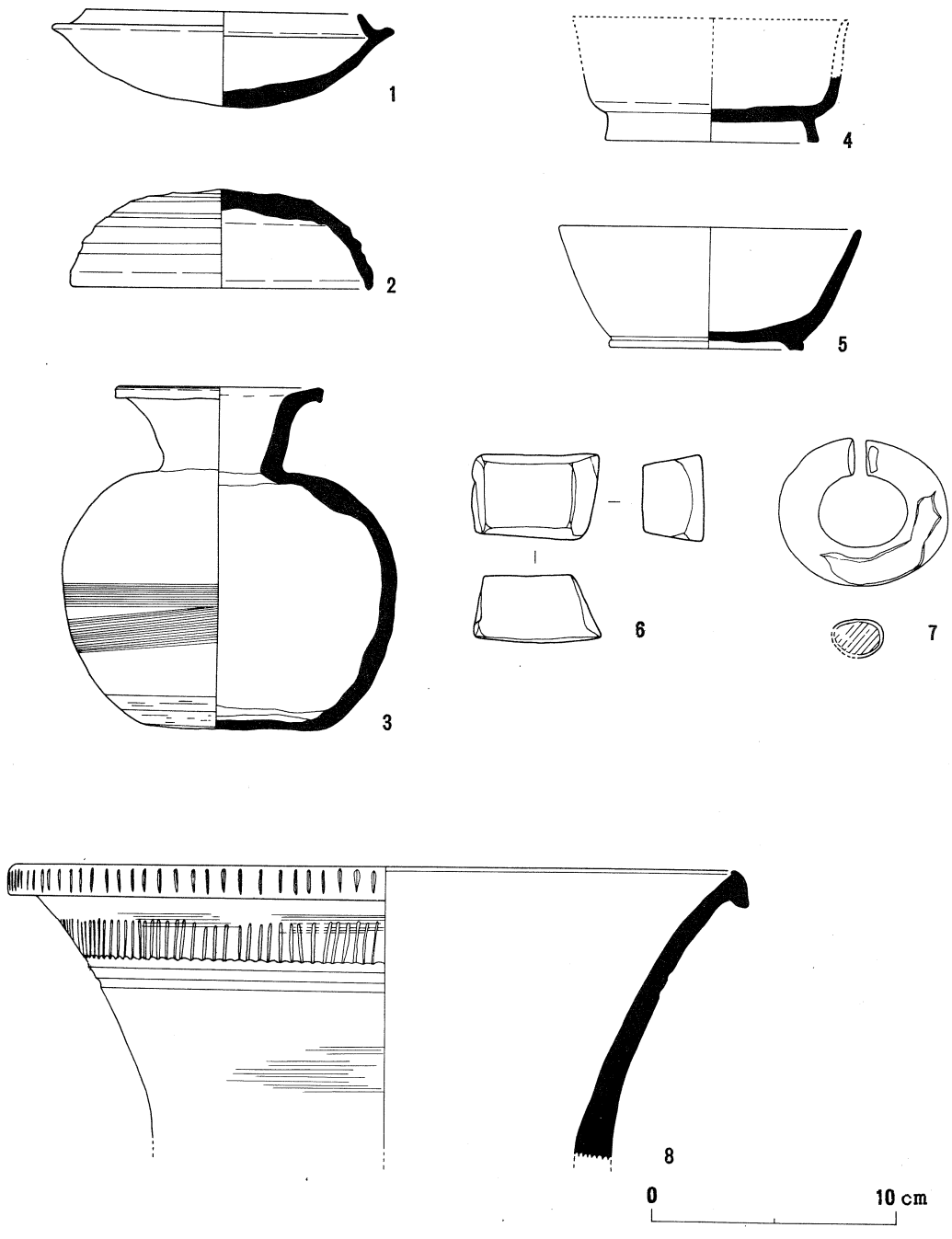


図２９　　表面採集遺物実測図（ 1/3 ）

Ⅳ 小　　結

少なくとも１５穴からなるこの松田谷横穴群は大田市内においては有数の横穴群である。この群の全体像を窺う手掛りとなるであろういくつかの点について以下に整理しておく。

まず、立地であるが、この横穴群の周囲には西側に熊屋谷、中山曾根横穴群、東には田長横穴群、西迫横穴などがあって大田市内における横穴の分布の核ともいえる位置にある。特に、熊屋谷横穴群はその数においてこの松田谷横穴群に比肩し、約１２穴を数えることは分布論から興味深いあり方を示す。

次に、この横穴群中の支群についてである。Ⅰ群：**5**、Ⅱ群：**7**（或は１～５号穴と６、７号穴とに細分できるかもしれない）、Ⅲ群：**2**、Ⅳ群：**1**（Ⅲ、Ⅳ群については、その地形などからこれ以外にも存在した可能性がある。）が確認され、数的には各群にバラツキがある。また、Ⅰ群、Ⅱ群（１～５号穴）はその支群内の配置から、強い関連が想定される。

さて、１５基を数える横穴の構造について、いくつか整理しておこう。

① 羨道を残す横穴はいずれも羨道部がきわめて短い。

② 天井は丸天井が大半であるが、Ⅳ群１号穴のように明確な平天井のものもある。

③ 排水溝を有するものがいくつかあって一つの特徴となっている。排水溝の形態は各横穴によって異なるが、いずれも排水溝として機能しうるレベル差を確保している。

④ 天井は全体的に低い。これは羨道の短さによって制約されたものと考えられる。

⑤ したがって側壁、奥壁とも十分に立上らない。

⑥ 床面は正方形ないし長辺に羨道をつける傾向が強いが、いずれも不整なものとなっている。またⅡ群７号穴のような細長く不整形なものもある。しかしⅣ群１号穴は、きわめて規格性の強い床面でかつ、がっちりした屍床を有しており、当横穴群中では異色である。

⑦ 横穴内の整形は必ずしも十分に行なわれていない例が多く、壁面にとどまらず床面にも無数のノミ痕を残している。

⑧ 羨門の閉塞装置はⅢ群１号穴を除きいずれの横穴も残存していなかったが、地山のくり込みから、板状の閉塞を行ったことが推測される。Ⅲ群１号穴の閉塞石はこの横穴群中では異例である。

⑨ Ⅲ群２号穴にみられる小形横穴は類例に乏しいため、埋葬施設と断定することはできないが、一応群の数に入れておく。周囲に足掛状のくぼみが存在した。

⑩　横穴の規模は大小様々で、類似性の強いものはなく、技法等を総合しても、同一工人による規格的なものとは考え難い。

⑪　二次的に攪乱を受けたものが多く、土師質土器が供献されたような出土状態を示すものもいくつかある。またⅡ群4号穴では天井が崩れ落ちた玄室内の堆積土中に、隣接する天王平廃寺跡のものとみられる布目瓦が含まれていた。

次に検出された遺物はかなりの量にのぼるが、二次的な移動をしたものが多く十分に一括かつ層位の良好な資料としては取扱えない。しかしⅡ群5号穴、6号穴出土土器は一括遺物として（ただ量的に減少している可能性は強い。）取扱ってよいものと考える。観察により気付いた点をいくつか列挙する。

①　玉、耳環は別の横穴のものとの類似点も多く、同一の入手経路が想定される。

②　須恵器は焼ひずみ等の傷みは少ない。蓋坏が主で中、大型品は甕片一片のみである。

③　須恵器の胎土中には白色ブロックの小土塊が大半の場合含まれていて、同一ないし近隣の生産地からの供給を想定させる。

④　土師器はいずれも丹彩品でⅡ群5号穴、同6号穴からのみ出土している。いずれも厚手で丁寧な整形、調整を行っている。

⑤　鉄器は直刀、刀子、鉄鏃の3種のみである。直刀の含まれる横穴とそうでない横穴の質的差があるようにもみえる。

⑥　横穴の時期は、初葬時の副葬土器が特定できないため、確定できないが、おおよそ次の期に分けることができよう。（追葬期間があるので、造営期間は重複する。）

1期：Ⅱ群3号穴、Ⅱ群5号穴

2期：Ⅱ群4号穴、Ⅱ群1号穴、Ⅲ群1号穴、Ⅱ群6号穴

3期：Ⅱ群7号穴

これらの時期区分は山陰における須恵器編年のⅢ期～Ⅳ期初頭にあたる。

⑦　後世に横穴内に供献された土師質土器は形態・技法に差があり、Ⅱ群3号穴出土の2個体が最も古い様相を示し、続いてⅢ群1号穴、そしてⅡ群4号穴出土のそれが供献されたものと推定される。

以上、略記してきたが、当横穴群の個体的、また地域史上における歴史的意義については、周囲の横穴群や集落跡を含めた今後の調査、研究に待ちたい。

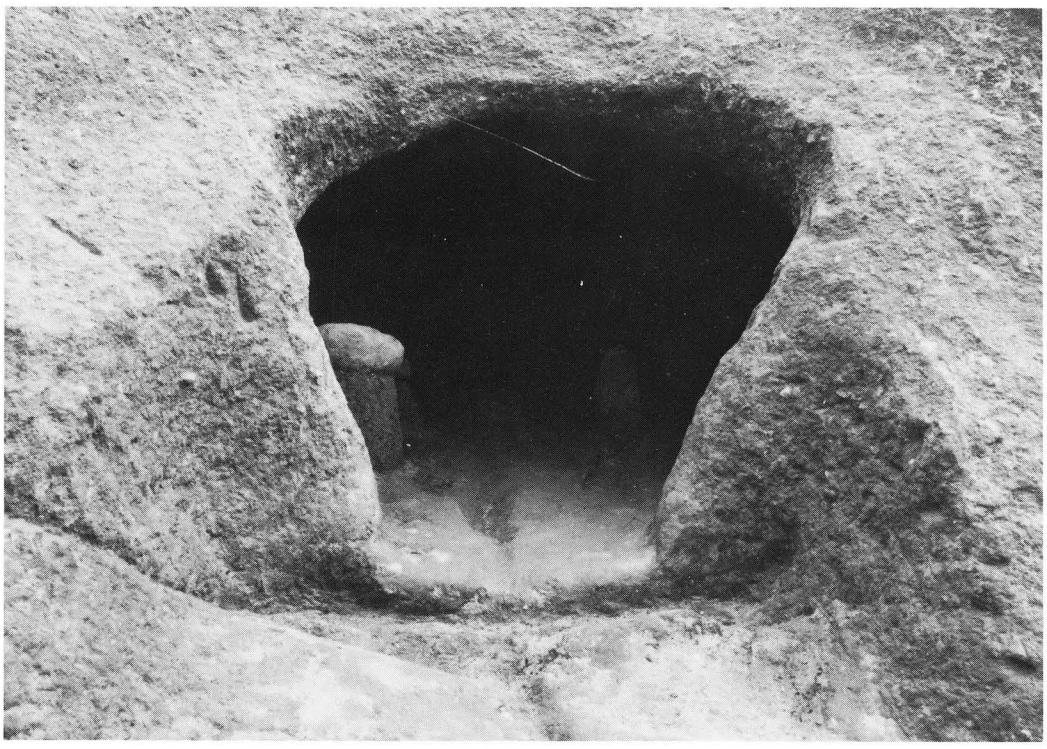
松田谷横穴群出土土器観察表

番　号	器種	法量（口径×高）cm	色　調	胎土	焼成	備　　考
図9－1	蓋	12.6 × 3.9	灰白色	?	良好	時計（ロクロの回転方向、以下同じ）
－2	坏	11.1 × 3.3	灰白色	?	良好	時計。
－3	蓋	11.4 × 3.6	灰白色	?	良好	時計。
－4	坩	8.1 × 9.3	?	?	?	時計。外面に自然釉の痕跡。
図12－1	蓋	12.4 × 4.5	青灰色	密	良好	時計。4／5完形。内面回転ナデ。外面回転ナデによるゆるやかな凹凸。ヘラケズリ複数。
－2	蓋	12.5 ×(4.5)	灰褐色	密	普通	時計。1／5。
－3	蓋	12.8 ×(4.5)	灰褐色	密	普通	時計。1／4。
－4	坏	12.0 × 3.7	赤灰色	密	普通	時計。底完形。回転糸切。
－5	坏	12.1 × 3.5	褐　色	密	普通	時計。底ほぼ完形。2 × 3㎜のゲンブ岩あり。回転糸切。内外面回転ナデ。
図15－1	蓋	11.7 × 4.4	白灰色	やや粗	普通	反時計。4／5強。赤色塗彩部あり。
－2	蓋	12.3 × 3.9	青灰色	密	普通	反時計。4／5強。砂粉極少。
－3	蓋	15.2 ×(4.0)	青灰色	密	普通	時計。1／5。
－4	坏	11.8 × 4.0	青灰色	密	普通	時計。ほぼ完形。外面に白色部あり(1／2)。
－5	坏	11.7 × 3.6	青灰色	密	普通	時計。1／2。赤色塗彩あり。
－6	甕	11.6 ×(3.6)	黒灰色	密	良好	反時計。口縁ほぼ完形。
－7	甕	11.7 ×(4.5)	黒灰色	密	良･堅	反時計。口縁1／3。
－8	高坏	13.8 ×(5.0)	赤茶色	密	普通	1／6。赤色塗彩あり。
－9	坏	8.4 × 1.8	褐　色	密	不良	時計。1／3。回転糸切。
－10	坏	(15.5)×(4.8)	燈褐色	密	普通	時計。底部のみ。底部同径他2個体分。
－11	坏	14.5 × 5.1	褐　色	密	普通	時計。4／5。回転糸切。
－12	坏	18.1 × 5.3	褐　色	密	やや不良	時計。2／3。回転糸切。
図18－1	蓋	12.3 × 4.1	青灰色	やや粗	普通	反時計。完形。
－2	蓋	14.7 × 4.6	青灰色	密	良好	時計。ほぼ完形。1／5なし。
－3	蓋	13.6 × 5.0	青灰色	粗	普通	反時計。完形。
－4	蓋	14.3 × 4.6	青灰色	やや粗	良好	時計。1／2。
－5	蓋	14.3 × 4.5	青灰色	やや粗	良好	反時計。完形。⑦とset。
－6	蓋	15.7 × 4.6	青灰色	やや粗	良好	時計。完形。
－7	坏	10.8 × 3.5	青灰色	密	良好	時計。ほぼ完形。

番　号	器種	(口径×高) 法　　量 cm	色　調	胎土	焼成	備　　考
図18－8	坏	12.4 × 4.6	青灰色	密	良好	時計。完形。
－9	蓋	10.6 × 4.2	緑灰色	密	良好	反時計。ほぼ完形。
－10	坩	8.3 × 8.6	濃灰色	密	良好	反時計。1／5。
－11	埦	15.8 × 6.7	赤茶色	やや粗	良好	
－12	蓋	14.6 × 4.1	緑灰色	粗	良好	時計。1／2弱。
図20－1	高坏	10.8×10.7	灰褐色	粗	良好	
－2	高坏	16.1×12.4	赤茶色	粗	良好	赤色塗彩。外面に石粒痕あり。脚下一部なし。
－3	高坏	16.8×11.1	赤褐色	粗	普通	脚部一部なし。剥落著し。
－4	坩	7.7×10.5	青灰色	粗	良好	時計。丁寧な成形。つなぎ目の接合も丁寧。 底部球形。
－5	高坏	18.2×11.4	赤茶色	粗	良好	赤色塗彩。脚一部なし。剥落若干。 全体に丁寧なつくり。
－6	高坏	17.8×13.2	赤茶色	粗	普通	脚下半部復原。
図21－1	蓋	12.2 × 3.9	青灰色	密	良好	反時計。内側に。
－2	坏	10.4 × 3.2	青灰色	密	良好	時計。1／4。ほぼ完形。
－3	坏	10.5 × 3.0	青灰色	密	普通	時計。1／4。
－4	脚付盌	10.7 × 9.1	濃青灰色	密	良好	時計。乳白色1／2。
図25－1	蓋	? × ?	青灰色	密	良好	時計。
－2	蓋	13.1 × 4.1	暗青色	やや密	良好	
－3	坏	12.4 × 4.2	青灰色	密	良好	反時計。4／5。
－4	坏	12.0 × ?	暗青色	密	良好	
－5	坏	14.4 × ?	青灰色	密	良好	1／5。
－6	坏	? × ?	燈褐色	密	普通	時計。底完形。静止糸切。
－7	坏	12.2 × 5.0	赤褐色	密	良好	時計。ほぼ完形。静止糸切。
－8	坏	? × ?	黄褐色	密	普通	時計。土師質。器形不明。
図29－1	坏	11.3 × 3.8	暗灰色	粗	普通	時計。1／3強。全体に丁寧。焼けひずみ有り。
－2	蓋	12.2 × 4.1	暗青色	密	良好	半分現存。
－3	壷	8.4×14.0	濃灰色	密	良好	時計。1／2強。
－4	坏	(11.0)×(5.1)	暗灰色	粗	良好	時計。1／2。
－5	坏	12.3 × 5.0	青灰色	密	良好	時計。
－8	甕	29.4 × ?	緑灰色	密	良好	反時計。

図　　版

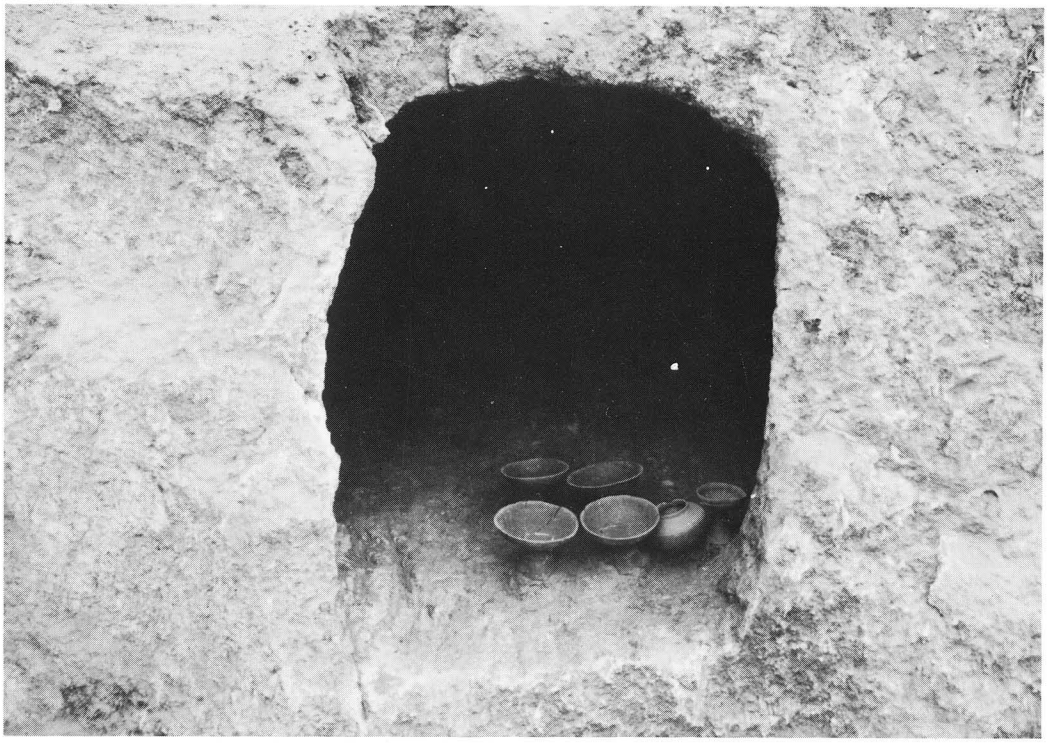
松田谷横穴群Ⅱ群全景（北から）



松田谷横穴群Ⅱ群 3 号穴全景

松田谷横穴群Ⅱ群 4 号穴全景

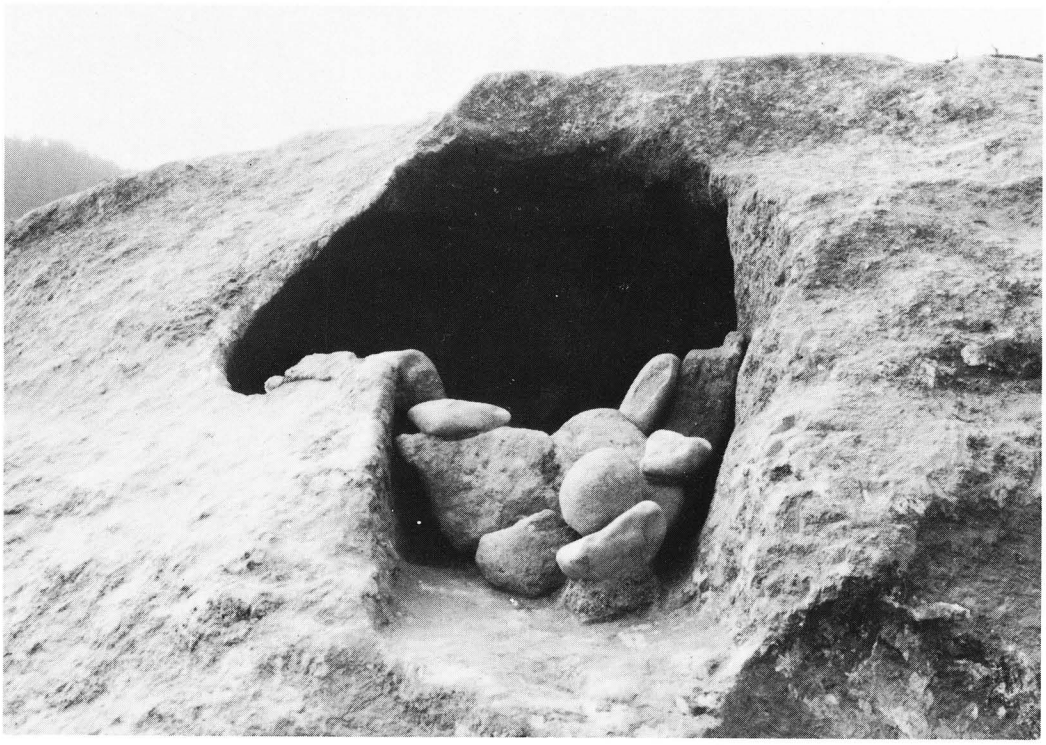
松田谷横穴群Ⅱ群 5 号穴全景



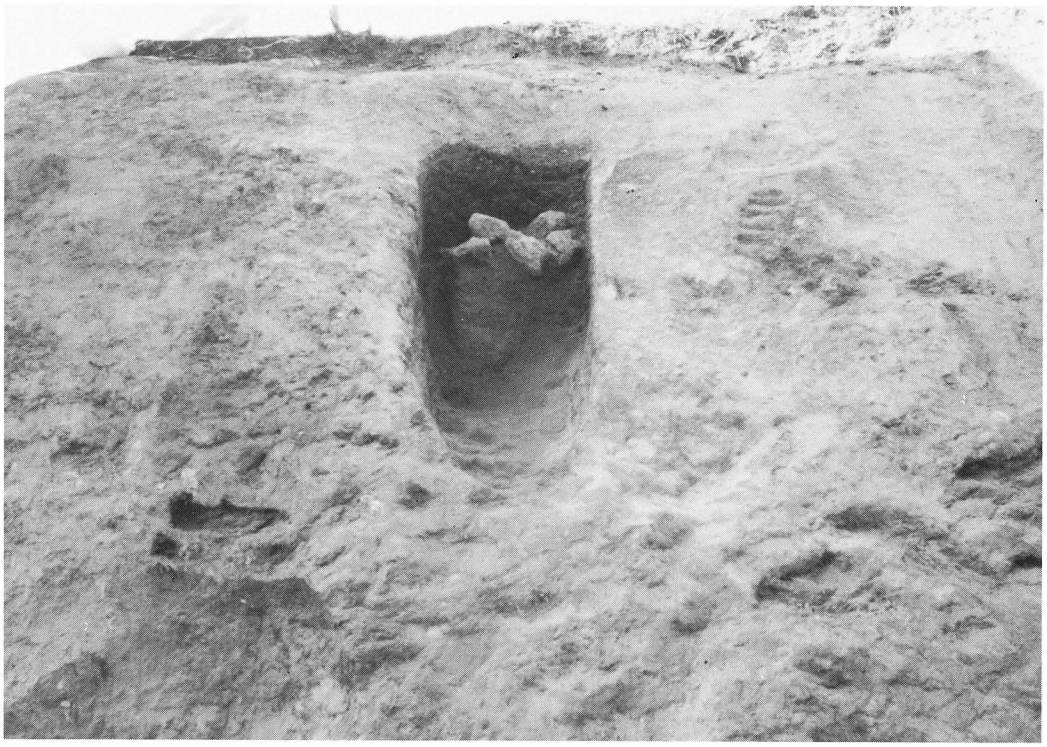
松田谷横穴群Ⅱ群 6 号穴全景

松田谷横穴群Ⅱ群 7 号穴全景

松田谷横穴群Ⅲ群全景（南から）



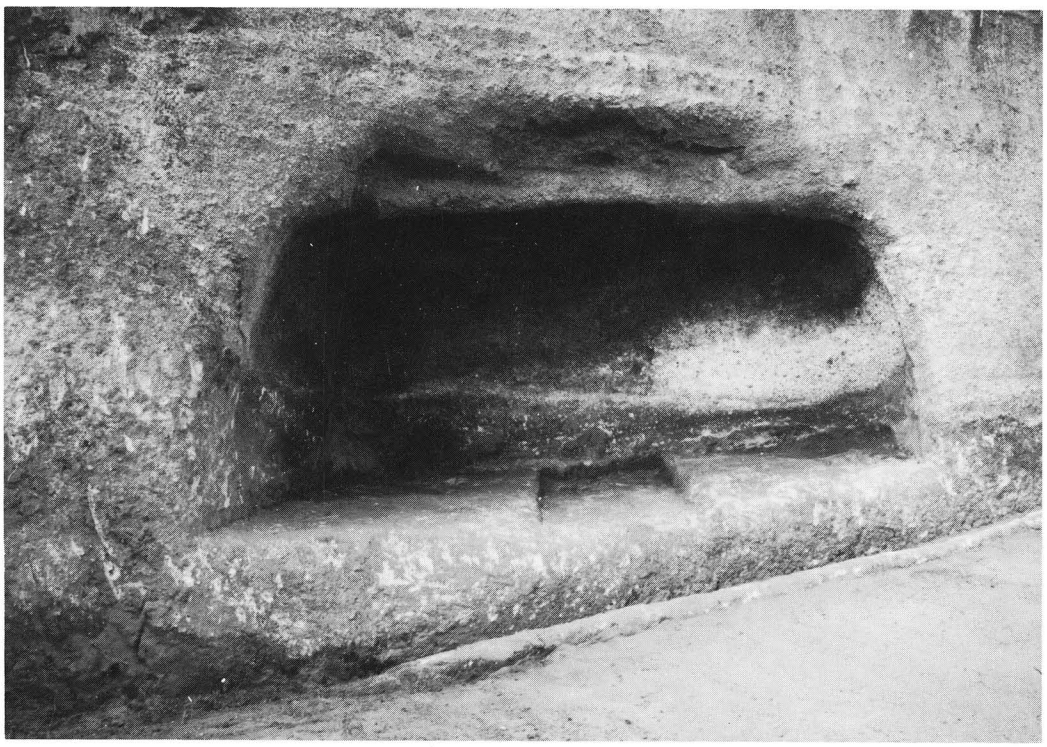
松田谷横穴群Ⅲ群1号穴全景



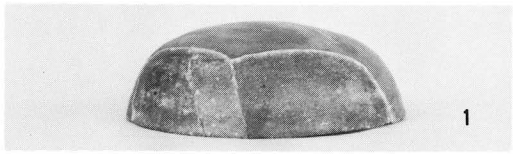
松田谷横穴群Ⅲ群 2 号穴全景

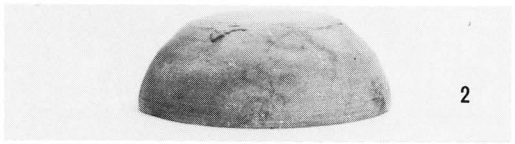
松田谷横穴群Ⅰ群 5 号穴全景

松田谷横穴群Ⅳ群全景（南から）



松田谷横穴群Ⅳ群 1 号穴全景

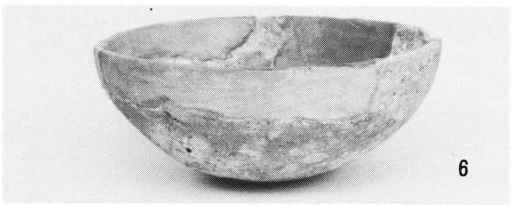

1


2

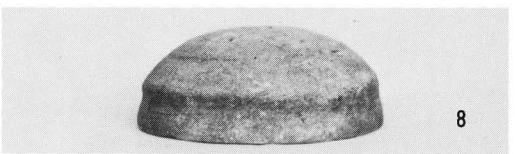
3

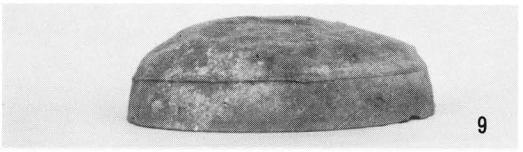
4

5


6

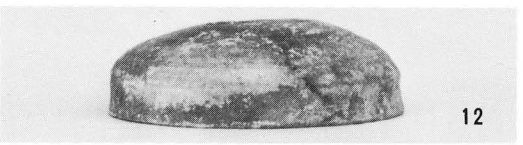
7


8


9

10

11


12

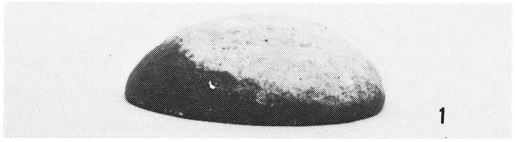
13

14

15

16

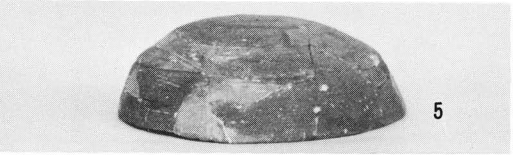
- Ⅱ群 3 号穴出土土器（ 1 ・ 2 ）
- Ⅱ群 4 号穴出土土器（ 3 ～ 6 ）
- Ⅱ群 5 号穴出土土器（ 7 ～16 ）

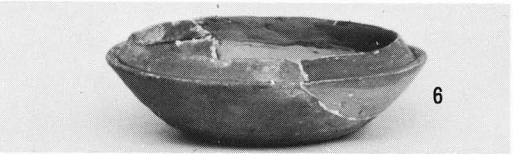

1

2

3

4


5


6

7

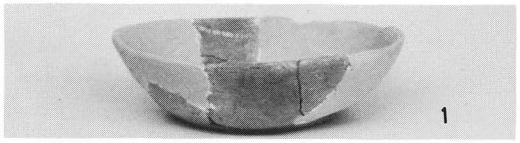
8

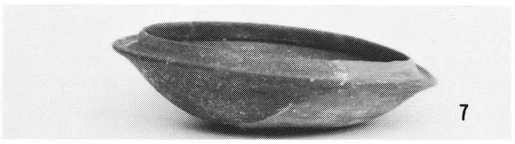
9

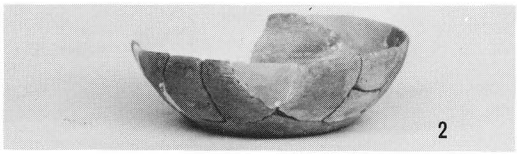
10

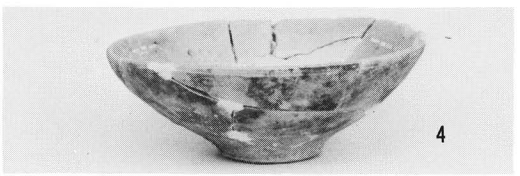
・Ⅱ群 7 号穴出土土器（ 1 ・ 2 ）
・Ⅱ群 6 号穴出土土器（ 3 ・ 4 ）
・Ⅲ群 1 号穴出土土器（ 5 ・ 6 ）

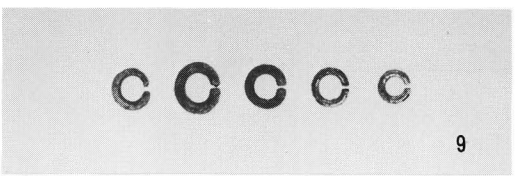
・Ⅱ群 6 号穴出土土器（ 7 ～10）

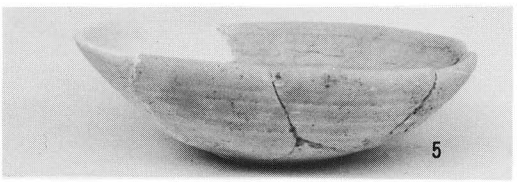


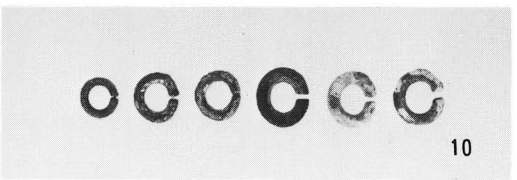


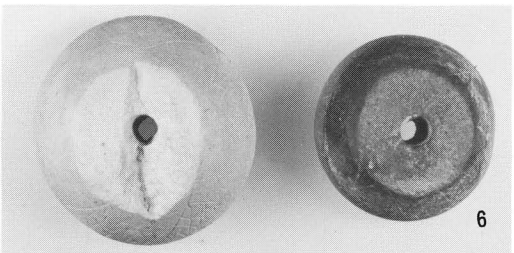


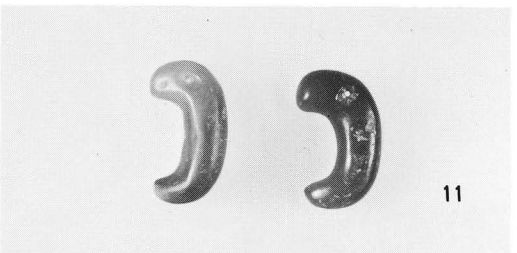












- Ⅱ群3号突出土土師質土器（1・2）
- Ⅲ群1号穴出土土師出土器（3）
- Ⅱ群4穴出土土師質土器（4・5）
- 紡錘車（6左Ⅱ群4号穴、右Ⅱ群3号穴）
- 表　採　土　器（7・8）
- 出　土　耳　環（9・10）
- 出土勾玉（11左Ⅱ群4号穴、右Ⅱ群3号穴）

１９８２年３月

編集・発行：島根県教育委員会

印　　刷：黒　　潮　　社